

シンポジウム 要 約

主催者挨拶 / 鴨下一郎 環境大臣

「自然公園法」制定の主旨と沿革、および本年がその施行 50 周年にあたることが述べられた。環境省は、自然保護制度の中核的存在である国立公園を守っていくとともに、自然体験の機会を国民に提供し、将来の世代へ継承していくことを重要な責務としている。日本の美しい自然環境をどのように守り、育て、大切に生かしていくか、本日のシンポジウムがそれらを考える場となることを願うと述べて、開会した。

特別講演 / 平山郁夫 『文化の根源としての日本の自然』

わたしたちの祖先が自然の美との触れ合いの中から培った「美の心」が、様々な文化のなかでどのように発揮されてきたかが語られた。文化的源流を等しくする中国の漢詩や建築は「構築的」であるのに対し、日本の和歌や仏教建築は「自然との調和」を重んじ省略を多用する。そのほか多くの具体例から、日本文化のオリジナリティと自然との関係が掘り下げられた。後半は、「自然との共生」という価値観と現代社会が抱える問題との関わりに話題が広がった。大都市には人工的な美が現れたが、その維持には倫理と道徳（真と善）が不可欠であり、それを失えば科学技術の成果も凶器となる。しかし日本人には、自然と共生してきた精神構造がもたらす知恵がある。それは、仏教を「神仏混交」という方法で迎え入れたり、文明開化を「和魂洋才」という発想で受け入れ、自らの文化を守ってきた歴史に現れている。その日本的文化の寛容さは、人類の共存・共栄を実現しながら、環境保護と国際貢献につなげてゆけるものだ と確信する、と結ばれた。

スライドショー / 森田敏隆 『美しい日本の自然』

40 年にわたって撮影された国立公園の写真を映写しながら、変貌する自然とその魅力、撮影にまつわるエピソードが語られた。森田氏が、「四季の彩りの豊富さが日本の自然の魅力」というとおり、三層の傘雲のかかった紅富士など、美しさと迫りに満ちた写真がふんだんに紹介された。後半、DVD によるスライドショーでは、会場内の照明を暗くして、音楽とともに、国立公園にあふれる美を観客は堪能した。台風によって枝折れした縄文杉の写真からは自然のうつろいやすさと後世へ伝えて行く難しさもアピールされた。最後に、スライドで森田氏のカメラマンとして自然の美を記録してゆく決意が述べられた。

講演 / 岩槻邦男 『日本の自然の科学的価値』

日本人と西洋人の自然の捉え方の違い、自然破壊とは、保全とはなにか？という問題提起について、科学者の立場から「美しい自然」が語られた。自然に対する感謝と畏敬の念によって裏打ちされた、日本人独特の自然観によって「奥山」が守られ、人里と里山が区別され、緑豊かな日本列島が形作られてきた。「鎮守の森」を守るという発想は、単に原始的アミニズムではなく、自然環境を保全していく上で 60 年代にユネスコが提唱

した生物圏保存地域(biosphere reserve)というコンセプトに通じるものがある、など、科学者から見た「美しい日本の自然」が語られ、「教わる」だけでなく自然環境から「学びとる」という姿勢の必要性が提示された。

講演 / 田部井淳子『世界の山々から見た日本の自然の魅力』

世界の極地に挑んだ壮絶な体験がユーモアたっぷりに語られた。1975年、女性だけのグループで登頂したヒマラヤ・エベレストでの死闘と果てしない絶景の世界、ところが後年、訪れた氷河の変わりようを見たときの驚き。エベレストから15年後、国際隊で挑んだ南極大陸。平均2,000mという氷の存在感。言葉を越えた美しさ。崇高な大地を汚さない努力。そして現在も続いている、世界各国の最高峰をめぐる旅。最後は、先日訪れた磐梯山の美しい紅葉の報告。日本の自然公園で幼少期を過ごしたことが、現在の山好きの自分を作ったと結び。自然を守っていくことの大切さと切実さがストレートに響く講演となった。

パネルディスカッション / 『国立公園に期待するもの』

コーディネーター：熊谷 洋一（東京農業大学教授）

パネリスト：岩槻 邦男（兵庫県立人と自然の博物館館長）

田部井淳子（登山家）

黒田大三郎（環境省大臣官房審議官）

はじめに「国立公園の仕組みと現況」が黒田審議官から報告された。最近、生物多様性の屋台骨としての役割が国立公園に期待されている。続いて田部井氏が、海外と日本の国立公園の違いを、アメリカやオーストラリアの国立公園を例に、(馬に乗って活動するパークレンジャー・園内で規則についてのレクチャー・場所によっては日本人向けのビデオが用意されていること等)紹介した。岩槻氏は「自然を知る研究の場」としての国立公園の意義を述べるとともに、IPCCとゴア元米副大統領のノーベル平和賞受賞の話題から、「生物多様性の問題」について次のように話した。『地球温暖化の決定的な問題は、生物多様性が壊滅的に影響を受けることにあるが、十分なデータがまだそろっていない。問題が広く認知されることが非常に大きい要素だと思う。』

日本の国立公園が海外からどう見られているかについて、田部井氏は『外国人は日本の国立公園に関してはほとんど知らないが、フジヤマという名前は知っている。日本の美しい国立公園をもっとPRしていきたい』と述べた。これに対して黒田審議官は、政府の外国人観光客誘致の取組の中で日本の国立公園の存在が高く期待されつつあることを報告した。アメリカに比べて環境省の職員数は圧倒的に少ないが、地域の人たちと協働して、国立公園サービスを磨き上げていきたいとも述べた。

国立公園内の建物などには、園内であることを実感できるデザインが必要ではないかという質問が熊谷氏から出された。これに黒田審議官が、『いろいろな看板をいろいろな人がそれぞれの趣味で立てているのが現状。ただし、環境省は「国立公園エントランス整備事業」を始め、サミットが開かれる洞爺湖から、いくつかの場所で入口をしっかりと

と示そうと検討している。』応えた。

岩槻氏は、日本は「人と自然の共生」というコンセプトを、もっと発信していくべきと語った。地球のサステナビリティを考えると、そのコンセプトがなければ成り立たず、森林を焼き尽くすことなく奥山を保全した共生のコンセプトは地球全体の環境保全に有益だという意見だった。田部井氏は、美しい自然は人を心から感激させるものであり、まず、公園のなかを若いうちに歩いて体感することをおすすめしたいと話した。

質疑応答

「国立公園に朝早く行くと誰もいないのがとても怖い、避難所の目印でもあると助かるのだが」

田部井：『私は、動物達がいる植物のある自然の中に、入らせてもらうという気持ちでいる。自己責任という言葉だけで済ませられない問題だが、海外ではすべて自己責任です。』

黒田：『ガイドシステムに関しては、日本はまだまだ改善する余地が十分あり、そうなれば本当に世界に誇れる保護と美しさの国立公園になります。』

「国立公園を指定する段階でなぜゲートや囲いを作らなかったのか？」

黒田：『日本の国立公園は、国有地と民有地が混在し、ゲートを作ることがなじむ仕組みになっていない。また、林野庁が管理する国有林を国立公園として指定しているため、ゲートによって人の出入りをコントロールすることが難しかったという背景があった。数年前に自然公園法を改正し、利用調整地区という制度をつくり、利用者の人数制限と、ガイドを付けるルールを設けるようにした。』

最後にパネリストから一言ずつコメントが述べられた。

田部井：『私が生きているあいだに、国立公園サービスが受けられるようにしていきたい。』

岩槻：『日本は西欧に比べて生涯学習支援のシステムが遅れている。生物学的には、ヒ

トは『受精卵から墓場まで』学ばなければいけません。そして環境問題は、“Think globally, act locally”です。自分の周りから環境の問題を考え、自分が学びとるという姿勢で考えていただけたらと思います。』

黒田：『今日ご来場の皆さんをはじめ、たくさんの人に、国立公園を見ていただきたいと思いますし、自然に親しんでいただきたいと思います。』

熊合：『「国立公園の父」と言われている田村剛先生の話为例に、外国人にはわからない日本の国立公園の良さを、今日お越しの皆さんは、是非理解して欲しいと思います。』

講演記録

開会～主催者挨拶

【司会・深澤里奈】 皆様、本日はお忙しい中、自然公園法 50 周年記念シンポジウム『美しい日本の自然』にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。今年は、わが国の国立公園制度の根拠となる自然公園法が昭和 32 年 10 月に試行されてから、50 周年の節目の年に当たります。環境省では、この機会をとらえて、日本の自然やその保護の中核である国立公園を広く知っていただくために、本シンポジウムを開催いたしました。日本の自然の美しさ、大切さ、守っていくための努力について、皆様と一緒に考えてまいりたいと思っています。私は、本日の司会・進行を務めます深澤里奈と申します。どうぞよろしく願いいたします。それでは、開会にあたり、主催者を代表して、鴨下一郎環境大臣よりご挨拶を申し上げます。鴨下大臣、お願いします。

【鴨下一郎(環境大臣)】 ただいま、ご紹介いただきました環境大臣の鴨下一郎でございます。自然公園法 50 周年記念シンポジウムの開会にあたりまして、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。ご参加の皆様におかれましては、遠路、そして全国からお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

さて、本日のシンポジウムのテーマである自然公園法は、国立公園など、わが国を代表する、いわば傑出した自然の風景地の保護と利用の増進を図ることにより、国民の保健・休養や自然体験に役立てることを目的とする法律でございます。昭和 6 年制定の国立公園法にかわって、今日の国立公園・国定公園・都道府県立自然公園からなる自然公園制度を構成する法律として、昭和 32 年に制定・施行されました。本年は、自然公園法の施行から 50 年目に当たります。わが国は南北に長く、亜寒帯から亜熱帯まで幅広い気候の下で、変化に富んだ山、川、海と多様な森、そこに息づく生き物など、豊かで美しい自然に恵まれております。その中でも、わが国を代表する自然風景地を国が指定し、その保護管理を行う国立公園は、わが国の自然保護制度の中核的な存在であり、生物多様性保全の、いわば屋台骨とも言えると思います。

私自身も、これまで尾瀬をはじめ、多くの国立公園を訪れまして、その素晴らしさに魅了されてまいりましたが、わが国を代表する自然環境である国立公園を守り、将来世代に継承していくこと、そして国民に優れた自然体験の機会を提供していくことは、環境省の重要な責務であると実感しております。国民各層の自然公園に対する幅広いご理解、ご協力を賜りつつ、地域の多様な関係者の皆様との協働により、国立公園の保護管理をより一層推進していく所存でございます。

最後に、自然公園法 50 周年を記念して開催するこのシンポジウムが、国立公園に代表されるわが国の美しい自然環境を将来に向け、いかに守り育て、大切に生かしていくかを考えていただく有意義な場になることを祈念申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

特別講演：平山郁夫

【司会】 ありがとうございます。それでは、シンポジウムを進めてまいります。まず最初に、日本画家の平山郁夫先生に特別講演をお願いいたします。平山先生は、文化勲章をはじめとするさまざまな賞を受賞されている、日本を代表する日本画家でいらっしゃいます。東京藝術大学学長を務められたあと、現在は日本美術院理事長などをお務めです。ご講演のテーマは『文化の根源としての日本の自然』です。それでは平山先生、よろしくお願いいたします。

【平山郁夫】 ただいま、ご紹介いただきました平山でございます。今日の環境省による『美しい日本の自然』は、いかにこれを美しく次の世代にずっと伝えていくかということで、大変この時代にふさわしいシンポジウムだと思います。私は画家として、もう60年来、まずは美しい日本、あるいはこの自然、あるいは国際的に、物理的な自然から、あるいは歴史的な、文化的な美しさというものを描き続けております。私事で恐縮ですが、21日まで、国立近代美術館で、また明日まで日本橋三越で、それぞれの回顧展や新作展を開催中でございます。

日本の自然を、皆さん、いろんな面で表現されて、それぞれの立場から、ご意見がたくさんおありだと思います。日本の、われわれの先祖は、どういうふうにして、この日本列島で長い時間を経て文化を築き、今日に至ったかということを考えてみますと、日本のある特徴、アイデンティティが自然と出てくると思います。われわれの祖先は、自然と共生する、自然の春夏秋冬の恵みをいただきながら、感謝しながら、生活するという価値観を持っておりました。感謝しながらも、ときどき洪水があったり、嵐で畑が損害を受けたり、また、せっかくいろいろ築き上げたものが地震によって壊れるときもあります。こうした自然の不可抗力の力というものも併せてよく承知しながら、自然の恵みに感謝する。こうした価値観、あるいは自然観、あるいは人生観というものが生まれました。

これだけ日本のきめ細かい春夏秋冬の自然の変化というものを、長いあいだ、それによって生活してきた日本人の感性のDNA というのは、非常に細やかなものを持っております。大陸型の大変厳しい自然、砂漠や、あるいは広大な大地、そして異民族が隣り合って、絶えず、これまた弱肉強食で、その脅威にさらされながら生活してきた民族、国というものと大きく、それぞれの民族の質というものが違います。こうした日本人の感覚的な細かい感性というものは、これは文化の面で、いろいろないい面に出ていると思います。

昨今は初等教育で、中央教育審議会で、どういう教科を勉強したらいいのかという、教育基本法なぞの見直しがされ、また、いろいろ論議されておりますが、ともすると直接に進学あるいは勉強に効果がないと思われるような美術や音楽、これがだんだんとカットされるようになっていくと聞きます。しかし、こうしたものは直接、ペーパーテストの教養教科ではないように見えて、実は日本人の感性、情操、あるいは観察の仕方と

いうものに大変な、ある特徴を子どもたちに身に付けさせる教科だと思います。これが政治、経済、科学の各分野に進んでも、最後に日本人のアイデンティティ、特徴というものが、日本の自然に育まれた日本人の感性によって、非常にきめの細かい、繊細な、行き届いた、という結論が出てくると思います。

物理学の湯川博士なぞも、世界的な物理学の研究に伍して、早くから中間子理論というものをお出しになったようですが、これも日本人の価値観に乗っかって、欧米の合理主義の世界では出てくることのない、発想が異なった、日本的な発想だと言われております。このように最後は、それぞれ生まれ、育った自然環境から得たさまざまな特徴で、これを今で言うグローバル、国際化しながら、日本の発信であっても、やはり日本人の普遍的な、こうした考えという、外国が持っていない部分を提供するというのが、大きな文化的な貢献にもつながってまいります。

前の安倍内閣でも「美しい国づくり」ということを表明されましたが、では、いったい美しいというのは何であるか？ 私たち芸術家は、これを何十年も問い続けながら創作活動をしてきましたが、やはり自然から「美しい」というものを教わります。自分の小さな庭を見ていても、春、夏、秋、冬と、自然の変化というのは大変に微妙なものがあります。冬で枯れて、立ち枯れのような木の上に雪が積もる。そして、またこれが銀世界になって、全然異なった表情を見せます。これがまた春になると芽吹いて、若葉が燃えるように出てくる。そして夏に、また秋に、というふうに大きく、いつの間にか自然の営みによって変化していきます。これを一生懸命感じながら、あるいはそういったものを勉強しながら、一瞬、一瞬の感動を、われわれは創作という、1枚の絵に永遠化するわけです。

自然の雑草を見ましても、小さな鳥から、あるいはバクテリアから、さまざまな生き物が庭にいますが、美しいということは、生きるという主張です。自分たちで仲間を、あるいは種の保存というのが難しい雑草、小さな花ですが、風に吹かれたり、あるいは美しく花を咲かせ、また集団で、その植物のよさというものを盛んに主張していますと、小さな昆虫が寄ってきてはその蜜を吸い、そしてついでに、あちこちへ種子を運んでくれるわけです。これが枯れたり、しょんぼりしたり、あんまり美しくない、虫たちも寄ってきません。ですから生きるということは、自分たちの命を後世に伝えるということは、それぞれの、どれも大変なおびただしい種類の花や木や、あるいは鳥たち、動物でも、懸命に努力しながら、主張しながら、後世に自分たちの命を、子孫を伝えております。

そうした様を、私たちはじっと観察するわけですが、これを今度は生物学者も、どんなにして、この小さな蟻から、あるいは大きい生物まで、この地球上に棲んでいるかということ、ファールブルの昆虫記のように、小さいときから自然を見て、あるいはダーウィンの進化論のように、どういうふうにして、それぞれの環境に合ったように生きるのかと。同じ種でも環境によって、砂漠で生きる、あるいは緑に覆われた、あるいは都市化に近いところで生きている生き物たちは、その土地に順応するように色を変えたり、あるいはそれぞれ生きる機能や時間をかけながら、工夫しながら、生きております。

そういう様を私たちは勉強しておりますが、外国と比べても、例えば風景にしても、この日本の春夏秋冬、特に湿気の多い、湿潤な空気というものは、山や自然の変化に大変富んでおります。空気が乾燥して何も無いときは、山が目の前にそそり立ちますが、少し湿気があると、ぐっと霞んで遠くに行き、また裾のほうは雲や、あるいは霞で見えなくなるときがあります。こうして見ると、本当にその山を刷毛（はけ）で上手に、霞をかけたように、また種類の違った美というものを、われわれは見せてもらっている。こうした美しさを文学に、あるいは歌に、あるいはそれぞれの感性に、知らないうちに組み込まれて、日本人の美の心を形成してきました。ですから日本人が変な行動をすると、「それはちょっと不自然じゃないか」と。やはり自然に乗った法則、森羅万象の、自然に背かない、自然にのっとった行動というものが、一番評価される。自然体というんでしょうか、無理をしない、リラックスというのは、そういったことを指します。

これが大陸で乾燥地帯へ行きますと、遠近がずっと遠くまではっきりしております。そして、いろんな建造物や、さまざまなものが立体的に見えます。しかし日本場合は、それが、こう、ポーッとぼけたり、山の山頂しか見えない、一部しか見えないというときは、見えないところを想像したりしながら自然を鑑賞します。これは日本独特の俳句や和歌にも出ております。同じ文化圏で、中国から文字をいただき、文化をたくさん、唐の時代、7世紀ごろから、どんどん日本は遣唐使によって学びましたが、中国の漢詩というのは、五言絶句で非常に合理的で、構築的です。これは文法でもそうですね。同じアジアでありながら、日本とはまったく違います。欧米系の言語のように主語がある。で、すぐ次に動詞がきます。ですから「われわれは、やりません・やります。何々を、どこで、どのぐらい」というふうに、実にしっかりとした文体で文章を作っていきます。これはおそらく異民族が、多数民族国家として入り乱れておりますので、曖昧な言葉では、みんな勝手に想像したりして、統一が取れませんので、合理的な文体というのがわかります。

しかし日本の和歌や俳句を見ますと、五・七・五で、五文字の枕詞に気持ちをインプットします。で、教養があれば、五文字から読み人の解釈で、いくらでも想像できます。そういう省略の方法があります。象徴的です。和歌にしてもそうです。叙情性、あるいは情緒的というんでしょうか。はっきり物を言わない。これが文章になっても、主語として「私」は付きますが、動詞が出てこない場合があります。「最後、読むほうが想像してください」ということで、曖昧な言葉で玉虫色に、スッと、こう、表現する場合があります。これは文化の相違として、私は中国・敦煌の文物を保護するときに、政府から頼まれて、事前協議団長になりましたが、いろいろな条件を交渉する文章を交互でやって、これだけ同文同種ながら文化が違うということが、具体的にわかりました。

例えば100の項目があって、1つずつ逐条審議しますが、できるものもあれば、できないものもあります。そういうので80点ぐらいは取れても、20点がなかなか難しいというような場合に、ペンディングになって、また会議を次回に続行しますが、われわれはできるだけ希望に沿おうとして、はっきりした「イエス・ノー」の結論を出さないことがあります。それを中国語に翻訳しますと、「中国では、そういう言い回しが無いんだ。

ダメならダメ、できるならできるにしてほしい」と。ダメならダメということになると、談判決裂です。で、なんとか玉虫色にして、ぼかして次につなぐわけですが、だんだん慣れてきますと、「これはとても便利だ」と言うんですね、中国の人が。そして可能な限り、いろいろな解決方法を見つけて、100%完結するまで、何回もかけてやったことがあります。これは同じ根っこをもらいながら、解釈や自然に対する感じ方、表現の仕方が違っております。

例えばお寺でも、初めは法隆寺や唐招提寺、あるいは薬師寺は、中国型の整然とした、中門があり、回廊があり、講堂があり、何重の塔があり、金堂があるという、シンメトリーな構成です。ヨーロッパの宮殿の庭でも左右相称です。日本は飛鳥、白鳳、天平時代ぐらいまで、一生懸命に中国のことを勉強しましたが、次の平安時代へきて、日本人の民族性や自然の表現、その他、表現に難しいことがあるということで、仮名文字を発明しました。例えば建築でも、高野山や比叡山を考えていただくと、門は山裾にあります。で、最低限の山の造作にとどめて、また、こう登って行って、ここに中門がある。で、また、こう行きますと、金堂がここにあって、塔があるということで、山を伐り開いて人工的につくらない。最小限に、場所だけ確保するという日本的な構成を、平安時代にはやっております。

こういうふうに、いろんな点で日本人の美意識は、日本の自然とともに生きるという、こうした価値観というものを十分に発揮しながら文化をつくってきました。また、いろいろな村に、あるいは背景が山にある村落の上には、お寺を建てたり、お宮を建てて、そこを礼拝しておりました。なぜかといいますと、もし災害があった場合に、そのあたりを造作・造築していますと、土石流で川下の集落が流れてしまう。損害を、ダメージを受けるということで、その一帯の谷間や山のほうは手を付けない。お宮さんの鎮守の森でも、お寺でも、ただ単にお参りするということではなく、その周辺を守るという意味合いもあって、「ここに手を付けてはいけませんよ」ということから、長い経験で、お宮をお祀りする、寺院をつくる。これがだんだん、大変な造築の科学的な、技術的なことができるようになって、開発をやる。

しかし大きな災害があると、押し流されて、川下の、あるいは谷の裾の集落が壊滅的になるということが、非常に近代的な工業力を持ちながらも変わりません。日本人のこうした知恵で、「そういったところは手を付けない。守っていこう」という、そういうものがあったと思います。特に大都会では、もう道から、あるいはもうすべて人工的な、これまた違う美しさもありますが、やはり何と言っても自然から学ぶということで、子どもたちには、ご両親や、あるいは学校で、できるだけ海や山や、あるいは草原といったところに、遠足でも、いろんな実習でも、子どもたちに接してもらって、あるいは写生をする。で、そういうところで大きな声を出して、歌でも歌いながら日本の自然と対話し、そして日本人の感性を代々つないでいく。そしてまた、そういうものから学ぶ日本人の美学というのがあります。

工業製品を見ても、機能がどんどん発達すれば、美が生まれます。自動車にしても、艦船にしても、飛行機にしても、家電製品でもそうです。全体の大きなデザインから、

さまざまなものが部屋にあっても、「なるほど。これは大変近代的で科学的だ」と感じさせます。しかし、いいからといって、自動車でもオートバイでもルールを無視すると、人身事故が起こる場合があります。美しさを維持するということは、こうしたルールを守る。真、善、これを伴う。倫理観や道徳観を持つ。その上で真を。「真」というのは、非常に合理的な科学技術を指すわけですが、科学技術の発達、これを上手に生かすには、ルール、使い方、そして総合的に美しく使い、人類の役に立つ、公共の役に立つということは、美しい、いいことであるわけです。この真善美のバランスが崩れたときに、たとえいい科学技術の成果でも、人に迷惑をかけたり、凶器となります。

その点、日本人は一生懸命、こうしたものを守ろうとしておりますが、一方では家庭の躰や、あるいは小学校の教えに道徳的に、あるいは教養的に押し付けるというのは、当然、人間としてお互いに幸せに生きるということは、この真善美のバランス、精神性や、知能や、さまざまな機能が融合しております。これを損なわないようにして、家庭や小学校や社会で、みんなが守っていく。そして、いい社会をつくるということになるかと思えます。

そういう点、私は文化財の保護を、国際的にもいろいろお手伝いしておりますが、日本の文化は、外国から仏教を入れたときは、神仏混交の形で入れました。先進した文化に飲み込まれるのではなく、在来の、先ほどから申し上げております、自然の恵みと共生するという日本人の価値観と一緒に、神仏混交で迎えた。それによって、また中国や朝鮮半島から、いろんなことを勉強しながら、だんだん日本化して、最後は黒船襲来まで、江戸時代には 200 数十年間、1 回も戦争がありません。非常に平和でした。武家の政治体制の下に、刀は差しておりますが、名君といわれる人は、領内を豊かに、自分たちの守っている人々が楽しく、平和であれ、ということの産業を興したり、いろんな教育の面倒をみたりというのが名君です。戦争の好きな名君は、みんな外されております。

近代化のために黒船が来て、日本は文明開化を迎えましたが、これもまた日本人の知恵で、和魂洋才。日本人やアジアの心を忘れないで、外国の進んだ文化を取り入れましょうという、これをひとつモットーにしました。「では今は何だ？」ということ我问われる時代ですが、62 年間、戦後、日本は戦争に負けながら、あるいは世界史の中で、無条件降伏しながら、これだけ経済が発展したというのは、かつて歴史上ありません。それはなぜかというと、平和だからです。62 年間、1 発の弾（たま）も撃たないで、例えばイラクへ自衛隊が出兵しましたが、いろんな大変なことがあったと思いますが、1 発の弾丸も撃たないで帰ってきている。これは武力による威圧や攻撃はしないという、国内外において、たくさんの犠牲者を出した上の歴史的教訓だと思います。そういう意味で、これからも日本が、こうした平和、あるいは真善美を持っていくならば。外国で ODA や技術協力や経済、たくさんやっております。また武器供与、売りつけなんかもまったくやっております。

そして、またさっきの話に帰りますが、文化の保存でも、法隆寺は世界最古の木造建築です。これを保存するということは、徹底的にオリジナルを伝えようということで、木造でも腐った部分だけを取り替えます。そして生きた文化、宗教として千数百年間、

今日まで、ずっと続いております。一方、神仏の「神」のほうは、伊勢神宮を見ますと62回、式年遷宮はもう数年で来ますが、同じ天平時代から、戦争があろうと、政変があろうと、20年ごとに遷宮を行っております。しかも御社(おやしる)のデザインは、1200年昔とまったく同じデザインです。で、工具も槍鉋(やりがんな)と言って、今のトンカチや鋸だとか、そういうものを一切使いません。天平時代のままの工法で御社を20年ごとにつくる。これは何を意味するか。これは物でなく、日本人の精神、文化の真髄を、20年を1世代として連綿と続けようという、そういう所作だと私は思います。

これが神仏混交の、外国からの文化の守り方。たとえ材木の持ちがいいから、あるいは今年は早く傷んだからということであっても、20年を1世代として、ずっと伝えてきた。このあたりに日本人の精神構造があります。これがどちらかに偏って、一原理主義(ママ)になりますと、かつての軍国主義のように孤立します。今、アフガニスタンや、イラクや、パレスチナで扮装があって、もう本当に罪なき一般人が路頭に迷っておりますが、これも一原理主義の衝突です。All or nothingで、どちらかが倒れるまで。しかし本来は、多様な文化がお互いに共存できる。日本人が暮れのクリスマスをお祝いしたり、ジングルベルの音から1週間後に、今度は除夜の鐘になったり、翌日はお宮参り。西洋文化や、仏教文化や、日本の神道のこうしたものを、1週間で全部やってしまいます。

日本のこうした寛容さというものが、パレスチナや中東方面に、大いに普遍的な1つの物の考え方として、皆さんに、いろいろご参考になればと、われわれは毎年、アラブ諸国の人や、イスラエルの人や、あるいは欧米の、そうした中東の研究者たちと一緒に平和を模索しております。これも日本人の、こうした「自然との共生」という、人も文化もともに共存・共栄して、人類の繁栄を願うという。これからますます日本人の、1つのこの価値観という、これが現在の環境を守ろうということにつながって、国際貢献の大いなる1つになると、私は確信しております。これをもって基調講演を終わります。

スライドショー：森田敏隆

【司会】 ありがとうございます。それでは続きまして、写真家の森田敏隆さんが撮影された、美しい日本の自然写真で構成したスライドショーを、森田先生ご本人の解説付きで、これから上映いたします。

(スライドショーDVD30秒)

【司会】 ただいま、美しい映像でプロフィールを紹介させていただきましたが、あらためて写真家の森田敏隆さんをご紹介いたします。森田先生は、日本の国立公園の写真撮影を続けて40年という、大ベテランの写真家です。風景写真家として、長年、撮影を続ける中で、日本の自然の美しさを、素敵な風景写真として記録されてきました。今日は、森田先生に国立公園の素晴らしい写真を見せていただきながら、お話を伺ってまいりたいと思います。森田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【森田敏隆】 よろしくお願ひします。

【司会】 では先生、さっそくですが、非常に難しい質問かとは思いますが、先生が考える日本の自然の魅力、これはどういうものでしょうか。

【森田】 先ほども大臣がお話しになった通り、南北に長い日本列島です。さまざまな気候と、そして動植物が多様化し、地形も複雑で、さまざまな特徴を持った景観を見せてくれる、その大自然に季節がうつろっていき、さまざまな季節の色合いを重ね合わせていきます。そして、そこにまた朝夕、盆地や湿原などで雲海が発生したり、ガスが発生したりという形で、より日本的な風景を醸し出してくれます。

【司会】 なるほど。複雑ということが、やはり大きいですね。

【森田】 そうですね。

【司会】 では、写真を何点かお見せいただけますでしょうか。まず最初の写真。こちらは、紅富士にかかる傘雲の写真ですが、傘雲が3段に分かれています。こういうのって、非常に珍しいそうですね。



スライド1

【森田】 ええ。1段や、富士山の頂上部分を隠して発生することはよくありますが、これは急に夕方になって急になって、雲が発生し、私が撮影できる場所の精進湖まで急いで車を走らせているそのあいだに、2段、3段という形に。そして、そこに夕日が当たりまして、紅富士の素晴らしい写真が撮れました。この雲は、翌日の天気を予報するとされている。

【司会】 そうなんですか!? これは、どういう天気予報になるんでしょうか。

【森田】 翌日は、やはり大雪が降りました。

【司会】 なるほど。では続いての写真にまいりましょう。こちらは波と潮岬灯台。紀伊半島の南端の風景です。灯台の背景にある、この真っ青な空と、激しく打ち寄せる波のコントラストがとても印象的ですが、これはどちらから撮られたものんでしょうか。



スライド2

【森田】 これは海岸から突き出した岩礁ですね。その上から撮影をするんですけども、かなり高い位置にありまして、まあ「まず波をかぶらないだろう」ということで。私も撮影するのは4×5カメラ（シノゴカメラ）、葉書サイズのフィルムで、逆像になるカメラで撮影いたします。太平洋上に台風が発生した時点で、台風の余波の波だけが、押し寄せてきて、上空は塵だとか、そういうものは全部吹き飛ばされますので、「真っ青な空に波が……」っていう条件になります。最近の台風は近海で発生した台風とともにやってきますので、「曇天の中で」という、嵐の風景ですが、昔はこういうことが南紀では普通でした。

【司会】 そうなんですか。そういうところでも、「だいぶ昔と今では変わってきているんだな」ということを感じますね。

【森田】 そうですね。だから、やっぱり近海で台風が発生して、すぐに来ますので、なかなかタイミングが合いません。

【司会】 なるほど。では続いての写真です。続いての写真は、草千里ヶ浜から夕映えの阿蘇中岳噴煙。そして夕日に染まる阿蘇中岳噴煙。そして朝日に染まる阿蘇中岳噴煙。これは3枚の写真を1枚で比較できるようにしたスライドなんですが、先生、この阿蘇山の中岳の噴火の様子を見ていますと、だいぶ景色に違いがあるように見えますね。



スライド3



スライド4



スライド5

【森田】 そうですね。阿蘇の場合、特に噴火のたびに色が違いますね、その噴煙の中に火山灰が混じる量によっても色が違います。で、これは、左の写真と真ん中の写真は10年ぐらいの年月がたっております。で、もう1つ右側、この3つとも撮影位置は同じなんです。草千里から中岳の噴火を見ているんですけども、たまたま「朝日を撮影したいな」と思って草千里でカメラを構えていたら大噴火が起こりまして。で、火山灰の下で朝焼けに焼けた噴煙に感動してシャッターを切り決定的瞬間を撮影することができました。

ただ、このあと火山灰が雪のように降ってきますので、急遽、急いで逃げないと。

【司会】 そうですよ。火山灰なんてかぶってしまったら、カメラが大変なことになってしまいますよね。

【森田】 そうですね。もうカサカサと音を鳴らしながら降ってきますのでフィルムだとか、カメラを傷めてしまいます。

【司会】 そうですよ。では続いての写真にまいりましょう。こちらは、きれいな紅葉の写真ですね。1枚目は、紅葉のえぞ沼から緑岳を望む。そして2枚目は、紅葉の樹海と式部沼ということで、ともに大雪山国立公園の紅葉の写真です。先ほど、「四季の彩りの豊富さが日本の自然の魅力である」というふうにおっしゃいましたが、「最近、紅葉って、あまり見られないな」というのが、私の個人的な感想なんですけれども。



スライド7



スライド8

【森田】 はい。特に標高の高い山というのは、少し紅葉が遅れたら、雪のほうが早いですね。

【司会】 雪が早くきてしまうんですか!?

【森田】 はい。紅葉する前に雪の影響で葉が縮れてしまったり、枯れてしまったりということが多く。それと、最近はこれほど鮮やかな紅葉に出会えなくなりました。

【司会】 そうですね。

【森田】 ええ。特にナナカマドの赤、ダケカンバの黄色ですね。そして、その向こうには針葉樹の緑色の三色紅葉。素晴らしい光景です。だけど、さすがに北海道の大雪というのは紅葉の名所です。天気さえよければ、今でもきれいです。私は一番いい時期に撮影をしていますのでそのころと比較してしまいます。

【司会】 そうですね。もう東京も、本当に今日から、「やっと本格的に秋かな」ってぐらい、ずっと暑かったですものね。

【森田】 そうですね。だから今年は1週間以上遅れているんじゃないですかね。

【司会】 そうですね。地球温暖化の影響が、じわじわと自然の風景にも影響しているんじゃないかなと思うんですけども。このような美しく魅力的な自然が、日本にはたくさんあるということなんですが、先生が40年間こだわり続けて撮影してきた国立公園。この国立公園であるところとないところでは、どんな違いがそもそもあるんでしょうか。

【森田】 やはり自然保護を大切にしており、人工物のない風景、原始に近い風景が多く残されており、われわれが撮影に行きましても、撮影ポイント、いわゆるビューティー・ポイントが数多くあるというのも国立公園ですね。そして山岳や高原で、高山植物が、大群落を形成するんですね。それが身近に見られるということが特徴だと思います。

【司会】 では、「そもそもあった自然の姿に触れなくなったら、国立公園に行け」という感じでしょうか。

【森田】 ええ、癒されますね。

【司会】 なるほど。最近、先生の写真を使って出版されました『日本の国立公園』という本がありますが、先ほど、私も拝見いたしました。本当に国立公園の自然の素晴らしさもさることながら、「日本中のこれだけの写真を、お1人で撮られたのか!？」ということが、本当に驚きです。先ほどもお話で、パスポートを取られたことがないとおっしゃっていましたね。

【森田】 はい、そうですね。

【司会】 たくさんのご苦労があったんじゃないかなと思うんですが、まず先生が日本の自然に魅せられた理由と、それからまた何かご苦労話があったら、お聞かせ願えますでしょうか。

【森田】 これだけの写真を撮れたということは、毎日新聞社で国立公園 50 周年を記念して出版した 4 巻セット本が非常に好評でしたので、10 年後、当時 27 カ所の国立公園を各 1 冊ずつにまとめて、写真集を出版してくれという依頼がありまして、1 冊ずつ各国立公園の写真集をつくらなければいけないという形で、10 年取り組みましたので、膨大な写真の量になってしまったんです。おかげで、ありがたいことに、たくさんの写真をストックすることができました。

【司会】 では写真を何点か、皆さんにもご覧いただきましょう。これ、本当に幻想的な写真なんです、写真のタイトルは「大観山より芦ノ湖と富士山、雪景色と満月」。これって、「本当によく撮れましたね」という感じですね。



スライド9

【森田】 ええ、その通りですね。すべての素晴らしい条件が、偶然にも重なり合ったということですね。いつもは雪が降ると、「紅富士を写したくて」と思って、大観山に登るんです。このときは、非常に大雪でしたので撮影場所にて仮眠、そして撮影のチャンスを待っていました、そうすると日本第 2 峰のある南アルプスの稜線に、黄金色になって満月が沈んでいくんですね。もう紅富士の前に感動してしまいました。

【司会】 そうでしょうね、本当に。大雪で雪が積もっているときに、満月にぶつかるということも、なかなかないタイミングでしょうし、朝日が昇っていくのと同時に、こう、月が沈んでいくっていう。

【森田】 そうですね。このあとの紅富士も非常に素晴らしかったです。

【司会】 そうですか。先生が、やはり自然から喜んで受け入れられている感じがする 1 枚の写真ですね。

【森田】 やはり風景写真というのは、どうしても「待つ」ということから始まりますので、待つことを重視しながら、自然がいろんな表情を見せてくれる、その瞬間、瞬間をとらえていくという形ですね。

【司会】 そうですね。さあ、次の写真です。続いての写真は、レンズ雲と利尻山ということなんです、レンズ雲というのが、右上に映っているものなんでしょうか。



スライド 10

【森田】 はい。レンズのような形をしておりますね。これも、やはり天気を予報する雲です、独立峰にたびたび出るんですけども、これほど見事なレンズ雲に出会ったことがない。この雲が大きくなったり、小さくなったり、2つになったり、3つにと変化を繰り返し、1時間ぐらい天空ショーを繰り広げてくれたわけです。だから、いろいろなシャッターチャンスがあって、数多くシャッターを切った中でも特に見事なレンズ雲になったときの写真がこれです。

【司会】 なるほど。何か「ものすごい量のフィルムを使ってしまうんじゃないか」という感じですね。

【森田】 そうですね、撮り逃しの無いように大量のフィルムを消費しますが最終的には、そのことによって決定的瞬間が撮れると思っておりますので。

【司会】 なるほど。さあ、続いての写真です。続いては、桜島の大噴火の写真。先ほどもチラッと、火山の噴火の撮影には、かなりご苦労があるというふうにお聞きしましたが、どんなところでしょうか。



湯之平展望台から桜島大噴火(森田久田撮影)

スライド 11

【森田】 これは桜島が非常に活発な時期で、湯之平展望台へ行くまでのあいだ、30センチぐらい降灰が積もってしまっていてね。車の轍(わだち)の中を登っていくんですけども、やっぱり自然の脅威を感じながら登っていくわけですね。そして、まず4×5カメラのセットが完了すれば展望台の室内に避難して、そこで噴火の瞬間を待ち続けます。大音響とともにセットしたカメラを持って飛び出してアングルと構図を素早く決めて、火口からもくもく、もくもくと上がり噴煙が立ち昇る。撮影を終えればすかさず室内に避難するが、後に現像すると、ほとんどのフィルムに火山灰のスリ傷が入っていました。

【司会】 それは火山灰？

【森田】 火山灰ですね。細かい火山灰が入ってしまっていて、それで無傷の写真は貴重な作品になったんですが。

【司会】 これは生き残ったうちの1枚？

【森田】 そうなんです。フィルムフォルダーにシートフィルムが1枚ずつ入っていますから、火山灰とか、塵や埃がが非常に入りやすいんですね。

【司会】 なるほど。自然相手ですから、「本当にご苦労があるんだろうな」というふう

に思います。私もカメラが好きで、いろんなところに旅行に行っては写真を撮ったりするんですが、今日、会場にお越しの皆さんも、きっとカメラがご趣味だという方は、たくさんいらっしゃると思います。私たちのような、特別な知識のない人間が、先生のような写真を撮るのは難しいけれども、ちょっと近づけるようなアドバイスが何かあったら、教えていただきたいなと思います。

【森田】 やはり僕は、「何を撮影したいか」という目的意識をはっきりさせて、そのための事前調査。場所だとか、あるいは時間、季節、光線を事前に調べるロケハンといいますが、そういうものをされて、そして今度は、それを撮影するために再び訪れる。一枚素晴らしい撮影できれば、人間というのは欲が出てきて、例えば夏に撮ると、「秋はどうなるんだろう?」とか、あるいは「季節のあいだはどうなんだろう?」「朝夕はどうなんだろう?」と。そういうことを繰り返すことによって、自然から学んでいくことで自分の写真が上達していくわけです。

【司会】 今、「ロケハン」という言葉が出ましたが、ロケーション・ハンティングの略なんですが、「ここで撮りたい」と思ったら、まず撮影をするために、その日は撮影しなくても行ってみる、状況を見てみるという、それが必要なんですね。

【森田】 はい。

【司会】 なかなか大変なことですが(笑)。

【森田】 それと、やはりフィルムを惜しみなく。あるいは今はデジタルの時代です、惜しみなくシャッターを押して、露出を変え、レンズを換えて、あとで落ち着いてからセレクトするという形だと撮り逃しのない、いい写真が残ります。

【司会】 なるほど。ぜひ皆さん、ご参考になさってください。さあ、それではここで、先生の作品のDVDのスライドショーをご紹介しますと思います。ぜひご覧ください。

(DVD スライドショー 13分)

【司会】 さあ、皆様には、先生が撮影されました素晴らしい映像をご堪能いただきました。何か、ちょっと仕事を忘れてしまったというか、何かこう、泣きたくなるほどの絶景に、きっと何度も遭遇されているんじゃないかなと思います。先生は40年にわたって国立公園、そして日本の自然について撮影をされてきたわけですが、40年前と今と、その経過、どういうところが変わってきたなと思いますか?

【森田】 一番ひどいのは、やっぱり火山噴火ですね。そして台風。だけど自然環境を

大きく変えるっていうのは人間ですね。人間による開発によって、大きく変わってしまう。だから、やっぱりそのへんを大切に、環境を大切に守っていただきたいし、開発に気を付けていただきたいなと思います。例えば、阿蘇の外輪山などで行われている草刈りや野焼き、そういうものを続けながら身近な自然環境を守る努力を続けている場所もあります。

【司会】 人が全然手を加えていないわけではない自然というのも、もちろんあるわけですからね。

【森田】 そうですね。先ほどの野の花みたいなのが、咲かなくなっちゃいますね。

【司会】 なるほど。さて、森田先生が撮影された縄文杉の写真を、ちょっとこちらでご覧いただこうと思います。これが、まず1枚目の縄文杉。これは1982年に先生が撮影されたものですね。



スライド12

【森田】 はい。

【司会】 そして続いて1992年に。こちらは、枝が折れていますよね。この10年間で、このように枝が折れてしまう。これは台風によるものなんですか？



スライド13

【森田】 そうですね、台風で。

【司会】 こちらは樹齢3000年とも7000年ともいわれている縄文杉ですが、やはり枝折れてしまうことによって、ずいぶんたたくまいが変わりますよね。

【森田】 またこのあとも、大きな枝が折れたそうです。

【司会】 そうですか!?! なるほど。
さあ、では続いての写真にまいりましょう。
こちらは、どんな写真でしょう。



スライド15

【森田】 瀬戸大橋は多島海景観、海の自然環境を壊した代表的な風景です。多島海を撮影する景観が消えたことを非常に寂しく思っていますが、長い年月がたつと、橋が不

思議と風景になじんでしまったということが、どういう意味なのか、僕にもわからないんですけども。ただ、大きな開発は、できるだけ避けていただきたいということですね。

【司会】 なるほど。では続いてまいりましょう。こちらは、どんな写真でしょうか。

【森田】 これは能登半島国立公園の中の千枚田ですね。白米の千枚田。棚田百選に指定されるまでは、耕作放棄がたくさんあった部分なんです。ところが、ボランティアの人たちによって、現在は全面耕作をされております。



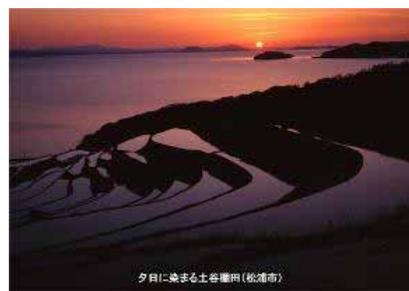
スライド16

【司会】 では続いてまいりましょう。

【森田】 これは、国立公園・国定公園区界に近い。最初は足摺宇和海国立公園に隣接する宇和島市三浦半島の水ヶ浦一帯に広がる段々畑です。続いて長崎県松浦市福島町の土谷棚田、玄界灘に沈む夕日の美しい棚田風景です。このような農村景観をも含めた保護対策が必要である。



スライド17



スライド18

【司会】 なるほど。難しいですね。棚田を作ったのも人間であり、自然を破壊していくのも、まあ、人間がやっているところでも……。

【森田】 ええ。放っておけば、すぐ山になっちゃいますから。

【司会】 そうですね。橋とかをかけると、それが自然崩壊につながるのか。けども、交通の便はよくなるのか。「難しいな」というふうに、やはり。

【森田】 ええ。私は自然景観が破壊されたり発生したりすることが寂しいですね。

【司会】 そうですか。先生、どうもありがとうございました。あらためて、先生のメ

ッセージを映像で、ここでお伝えしながら、終わりにしたいと思います。

(DVD スライドショー)

森田さんのメッセージ

美しい日本の自然。わが国には、特色を持った地理的景観がある。移りゆく季節の彩り、雲や雲海、それに朝夕の光などの自然現象が重なる一瞬の出会い。そんな荘厳でドラマティックな風景に感動し、一期一会の世界に魅せられ 40 年になる。

私は、美しい時代の風景の証人として、変貌する自然景観の記録を続けている。自然公園法を遵守する人々によって、優れた自然の風景地が保護され、貴重な風景を撮り続けられたことに感謝します。

今後は、国立・国定公園に隣接する貴重な文化的遺産である棚田や段々畑など、里地・里山や湧き水、小川を含めた、人間に身近な自然風景の保全も大切だと思っている。多様で美しい日本の自然が、将来世代に引き継いでいかれることを願ってやまない。

森田敏隆

【司会】 ということで、写真家・森田敏隆さんでした。先生、どうもありがとうございました。

【森田】 ありがとうございました。

【司会】 「本当に美しい景色を日本は持っているんだなあ」というふうに思いますね。「やっぱり守っていききたいな」というふうに、強く実感いたします。

さあ、それではここで、10 分間の休憩を挟ませていただきます。本会場ロビーでは、後援団体による展示・販売ブースが設営されております。また 5 階・大会議場では、国立公園とサンゴ礁の写真展を開催しています。写真展会場へは 2 階階段で行くことができますが、混雑している場合には、一度、1 階に下りてから、別の入り口からエレベーターでお上がりください。この休憩時間をご利用になって、どうぞご覧ください。岩槻先生のご講演は、10 分間の休憩を挟んだ後に始めさせていただきます。なお、お席をお立ちの際は、貴重品をお持ちくださいますようお願い申し上げます。

(休憩)

講演：岩槻邦男

【司会】 お待たせいたしました。ただいまより、シンポジウムを再開いたします。生物学者の岩槻邦男先生に、『日本の自然の科学的価値』というタイトルでご講演いただきます。岩槻先生は植物分類学がご専門で、東京大学教授、放送大学教授を歴任され、現在は兵庫県立人と自然の博物館の館長をなさっています。では岩槻先生、よろしくお願いいたします。

【岩槻邦男】 ご紹介、どうもありがとうございます。岩槻です。しばらくお付き合いをお願いいたします。私自身も、非常にきれいな写真で、ちょっと酔っぱらった気分になっている時、皆様方もたぶんそうだと思いますけれども、そういうところへ出てきて、科学というような冷たい言葉の出てくるお話をさせていただくのは、非常に条件が不利だなと思いながら、ここに立たせていただいております。しかも、もう最初のスライドから、そういうことになると思うんですけれども、平山先生にお話しいただいたことが、ある意味ではすべてで、そのお話を、私は今日は、科学というキーワードを使ってなぞっていかせていただくという、そういうお話になろうかと思います。

当然ですけれども、『日本の自然の科学的価値』という表題を与えていただいたわけですが、この表題だけを見ますと、たぶん多くの方は自然科学の話になるかと思われると思いますし、ひょっとすると、中には「科学技術とのつながりかな」という勘繰りをされる方もあるかと思いますが、もちろんここで申し上げます科学という言葉は、すぐ次に出てきますように、そういう意味の狭いつもりではございません。それから、言い訳ついでに、もう1つ言い訳をさせていただきますと、何枚かパワーポイントのバックに写真を使わせてもらいますけれども、これは写真だと思わないで、今日は見てください。科学的に言葉で表現できないことを、自然をお借りして見ていただくというつもりで、あまり殺風景だといけないので、入れさせていただいたもので、あの写真のあとでこれが出てくるのは、私自身、見ていて恥ずかしいですから、そのつもりで見たいと思います。

このお話をさせていただくことが決まってから、まあ私も、いろんな雑多な本を読みますけれども、柳宗悦さんの『美の国と民藝』という本を読んでいましたら、こういう素晴らしい言葉に行き当たったんですね。最初に申しましたように、まさに今日の平山先生のお話と裏腹になるということのアポロジー（apology）になるんですけれども、芸術とか、科学とか、宗教とかというのは、もともと人の知的活動で成り立っている。要するに文化を造るものですよね。ですから本質は基本的に同じなので、科学が「美しい自然」という言葉を表現できるかどうかということは、非常に難しいんですけれども、それを今日は、まあ、ちょっとやってみようと思うわけです。

私はしばしば、こういうお話のときに何うんですけれども、「初めて花が美しいと思った人は誰かご存じですか？」という、植物学側の質問をさせていただくんですけれども、今日は時間があれですから、さっさと話を進めさせていただきますけど、それは誰も知

っている人はいないはずですよ。歴史の本にもそういうことは書いていないと思います。ただ、私はしばしば、カタカナ書きの「ヒト」と漢字書きの「人」というのを区別して話をさせていただきます。人と一番近縁な動物はチンパンジーであると言われる。人とチンパンジーの差は、遺伝子でいうと約 1.2%であると。これは日本の研究者が最も大きい貢献をして明らかにしたことですけれども、1.2%であると。1.2%の違いというのは、大きい違いか、小さい違いかというのは、いろんな人によって受け止め方が違うと思うんですけれども、それは動物としてのヒトですね。それをカタカナ書きの「ヒト」で表現させていただきたいんですけれども、カタカナ書きの「ヒト」と、カタカナ書きのチンパンジーは 1.2%の違い。

ただ、花を美しいと思い、花に不思議を感じ、花に神秘を見るというのは、動物では無いことなんですね。奈良公園の鹿が、桜の花が咲いているのを、うっとり眺めたということは、これは動物行動学の人に言わせても、無いんだそうです。チンパンジーに関しては、最近、いろいろ、霊長類学者の人たちが貢献していらっしゃるがありますので、細かいことを言い始めるとキリがないんですけれども、今日は多少、独断的に話をぶった切らせていただきますけれども、そういう言い方からしますと、知的活動というのは、人に固有の働きであると。で、自然というものの中から現れたヒトが、漢字の「人」になってきたというのは、文化を持つようになってきたことだと。

兵庫県の博物館の私の前任者は、河合雅雄先生です。河合雅雄先生というと、霊長類にも前文化の段階があったという。幸島のイモ洗いから始まって。72年に、その論文を書かれてから、西洋の学者が、なかなか認めてくれなかったのが、最近では、ほとんど通説になりつつあるわけですけれども、それもあくまで「前文化」という言葉を使っていらっしゃるということを、ちょっと引用させていただきながら、前へ進ませていただきますけれども。そうしますと、自然との対応の中で、平山先生の話の中にもしばしば出てきたんですけれども、日本の自然に対する畏敬の念というのは、えーと、次へ進んでいただいたほうがいいかな。次、お願いします。ああ、ここにも書いていなかったな。日本の自然というのは、豊かな自然であります。豊かでありますけれども、災害が非常に多いという。これはもう寺田寅彦なんか、既に早くから指摘していることなんですけれども、そういう災害の多い自然というものに対する感謝の念と、畏敬の念とが混ったものである。

それに対して西欧的な見方、これも非常に独断的な割り切り方をさせていただきますけれども、西欧的な自然観というのは、「自然 = nature」という言葉は、実は「wild」に通じる言葉なんです。Wildというのは、悪魔の棲む世界。悪魔の棲む世界ですから、文明によって征服することによって、新しい善をつくり出すという、そういう世界ですよ。で、しばしば「人と自然の共生」という言葉が使われる。これも、「人と自然の共生」という言葉が、今ほど普通に使われるようになったのは、皆さん、あまり意識されないようなんですけれども、90年の大阪での花博のときにサブ・テーマになって、それ以来、定着するようになったんですけれども、実は、こういう言葉を使うようになった、まあ最近では、環境省だけではなく、いろんなところで「共生」という言葉が出てこない、

リポートは落第であるというような雰囲気にならなくなってしまっていますが、こういうのを言葉として使わないといけないようになってきたというのは、極めて残念なことです。

今から申し上げますように、日本人というのは、自然に対する畏敬の念を持ちながら、自然と共生する生き方をした、ひょっとしたら世界で唯一の民族かもしれない。そういうことに、我々日本人は、もう少し誇りを持って、この考え方、この概念を世界に発信していかなければいけないのではないかと思っています。科学の話ですから、科学ということから言いますと、こういう話で、科学で何があるかということ、生物資源の問題で、自然をどう見るかということがあります。資源という言い方をしますと、ついつい近代文明で見る物質エネルギー志向の豊かさ、西欧文明で見る物質エネルギー志向の豊かさということのを頭に置いてしまうんですね。中国では、古くから自然物を財産と見るという考え方が非常に強いですから、博物誌というのを非常に重視して、その考え方は今でもまだ、近代科学がどんどん入ってきたとしても残っていると思います。

そういう生物資源とのかかわりで、あの生物多様性条約によりますような、生物多様性の持続的利用というようなことを言いますと、これは資源としての生物多様性、遺伝子資源をどう生かすかというような話になって、そうなりますと、バイオテクノロジーによって、潜在遺伝子資源をどう活用するかというような話にもつながってきますし、それから人間関係を維持する上での生物多様性を、どう守っていくかということにもかかわってくるわけです。ついでに、ちょっとだけ「自然保護」という言葉と、「環境保全」という言葉を並べさせていただいたんですけれども、環境省がまだ環境庁だったころは、自然保護局というのがあったんですね。それが今では自然環境局となっています。今日、あとでパネラーとして出てこられる黒田審議官は、その担当の審議官ですけれども、それがどういうことなのかということは説明しませんので、今日は皆さん、頭の中でお考えいただきたいと思います。

平山先生は、前ユネスコ日本国内委員会の会長です。現在は、吉川元東大学長がやっていますけれども、平山先生が会長をしておられて、私もユネスコは、自然科学の小委員長なんかで、多少お手伝いをしているんですけれども、自然ということになりますと、そこでの話も、ちょっと触れさせていただきたいと思うんですけれども、まずユネスコといいますと、最近では、すぐ世界遺産というのが話に出てきます。

そしてまた自然遺産というのが出てくる。世界自然遺産というと、屋久島と白神があって、2年ほど前に知床が登録されたというような話になってくるわけですが、実は自然遺産という概念ができるもう1つ前に、ユネスコ MAB が biosphere reserve という考え方をつくったんですけれども、それが1960年代なんです。概念をつくり上げたのは1960年代なんですけれども、やっと1960年代になって、世界の生物学者が集まって、形として整えたのが、地域の環境を保全するためには、保全のための core area、核心地域を設けて、核心地域と transitional な、residential な area、まあ居住地域とのあいだに、buffer zone というのを、しっかり設けましょうという、そういう概念の整理をしました。それがやっと1960年。よく進んでいると言われる科学がつくり上げた

のが、1960年なんです。

ところが日本列島が歴史的にどう開発されてきたかということをとどけてみますと、このへんも多少、日本人であることの誇りを反芻したいところなんですけれども、これもまたついでに、ちょっと考えたいんですけれども、日本列島で最初に自然破壊をやった人という、皆さん方は誰だと考えられますか？小学生でも高学年になりますと、「自然」という言葉の反対語は「人為・人工」だと、素直に理解してくれるんですね。ということは、自然に対して人為・人工が加われば破壊が進むということですね。その言葉を、現代の字引に定義されているように、字義通りに解釈すれば、最初の大規模な自然破壊というのは、日本の場合は新石器時代に農耕が始まったときに、大量の森林を伐開して、そのあとに、初めはヒエやキビだったらしいですけれども、やがてイネという単作農業を始めるようになったというのは、これはもう決定的な自然破壊ということになります。

しかし、おそらく自然破壊が新石器時代から始まったとは、どなたもおっしゃらない。ついでに、ちょっと皆さんに示唆しておきたいのは、「自然破壊」という四字熟語は、実は今でもまだ広辞苑には、見出し語としては載っていないんです。どうやら「自然破壊」という四字熟語は、日本ではまだ定着していない言葉のようらしいんですけれども、それがなぜかというのは、ちょっとお考えいただきたいと思います。

それで新石器時代から、私はそれを自然破壊とは呼ばないんですけれども、自然に変貌を加える行為が始まったわけですね。ところが日本の場合には、居住地域の人里というのは、現在でも国土の4分の1ぐらい、20%強の面積ですね。国土の約半分は、いわゆる奥山であって、その奥山と人里のあいだに、多くの場所ではベルト状に、最近では「里山」と呼んでいる地域が発達しています。それがいつから発達したか、いつから定着したか、あるいは里山の定義をどうするか、いろいろな意見がありますので、このへんも多少、独断的に話を進めさせていただくんですけれども、その里山も二次林というような定義の仕方から考えますと、20%強ぐらい。ですから国土の半分ぐらいは奥山です。今でも、空から日本列島を見ますと、緑が豊かであるということは、どなたもお感じになることですし、外国人なんかは、特にそのことを非常に強く感得するみたいなんですけれども、そういう形が出来上がっているんですね。

実は、そのゾーニングというのは、1960年代になって、やっと世界中の科学者が一生懸命に考えて、「将来、保全地域はこういうふうを設定しましょう」と。最近では、日本の国立公園もそのゾーニングに従ってというような展開がありますけれども。というようなことを考えたのは、日本では既に歴史的にそういうのをつくり上げてきたということがあるんですね。しかも大切なことは、これはもちろん科学者がそういうことを指摘したわけでもないですし、そのときの政治家だとか、オピニオンリーダーたちが、「こうしましょう」と言っただけではなくて、日本人、我々のご先祖が、毎日の生活の中から、しかも、まあ北海道はちょっと別として、本州北部から、これは里山の研究者に言わせるとそうなんですけれども、本州の北部から琉球列島までを含めて、もちろん一続きのゾーニングにはなっていませんけれども、基本的にはそういうゾーニングが成

り立っているというのが日本列島なんです。ということは、自然の環境保全ということに関しては、日本人は非常に優れているということ、まず理解したいと思うんです。

「それが、なぜそういうふうになってきたか？」ということを考えますと、先ほどもちょっと言いましたが、自然を見る日本人の目というのが、自然科学の立場から言っても、そういうことなんですけれども、まさに八百万の神、自然というのは八百万の神。八百万（やおよろず）800万というのは、「不定」ということだそうで、innumerable だそうですから、すべてのものが八百万ですよ。で、「すべてのものが神である」というのは、「自然そのものが神である」という意識を持っていて、その中には、寺田寅彦が指摘していますように、災害がしばしば起こる自然に対する恐れ、というのもあったのかもしれないけれども、恵み豊かな自然というところもあって、それに対する畏敬の念があった。これは、西欧的な考えで、ヨーロッパでも北米でもそうですけれども、絨毯的に開発して行って、慌てて、「緑がないから、緑を保全しましょう」というやり方とは違って、日本は初めから、奥山はアンタッチャブルという展開の仕方でした。これは地形の問題もありますし、いろいろと他の理由ももちろんあるんですけれども、結果としては、そういうふうになってきていたんですね。

このごろ「鎮守の森は、自然が保全されているところだから大切にしましょう」と言われているんですけれども、さらにもう一步踏み込んで、「なぜ鎮守の森が残されてきたのか？」ということまで考えますと、私は、そのコンセプトを持つということが、自然を大切にすることにつながると思うんですけれども、それは、鎮守の森はしばしば言われますように、奥山の依代（よりしろ）ですね。鎮守の森もまた共通して、本州の北から琉球列島まで、非常に小さい村落にまで必ず氏神があって、鎮守の森で覆われている。しかも、こういう宗教施設で、外国では、そういう例というのは、ほとんどないですね。中国の仏教は、日本の仏教とちょっと違いますから、神秘さを求めて山の中にお寺を建てるということはあっても、建てたものに森を招来するというやり方ではないんです。

それは、基本的には、今風の言い方をしますと、自然を、森林を伐開して村落をつかった。それは生活上、必要であったからつくったんですけれども、つくったことに対して神へのアポロジーですよ、「申し訳ない」という気持ちがあって、その「申し訳ない」という気持ちを、やっぱり神様には、村にも来て守ってもらわなければいけないと言って、氏神をつくり、神様に住んでいただくためには、奥山をそこへ招来しないことには、神様は安住できないんだと。そういう説明は誰もきっちりやっていないんですけれども、そういうことが、日本の鎮守の森のコンセプトの底にあるものだと思うんですよ。

しばしば、「八百万の神を今でも尊敬するのは、アニミズムを今に引きずっているんだ」という欧米の人がいるようです。平山先生の話にも、ちょっと出てきましたけれども、例えば仏教が日本に入ってきて、本地垂迹になったというような、日本的な、そういう宗教的な観念の発展のさせ方というのは、西欧的な理解では、ちょっと理解がつかないような、そういう側面があって、どんどん進んできて、今の鎮守の森になっている。ですから、鎮守の森に凝集している考え方というのは、決して原始的なアニミズムそのものではなくて、非常にモダンなコンセプトであるというふうに、我々は理解している

かと思うんですけれども。

そういう形で日本の自然が美しく維持されてきたというのが、今、自然公園をどう造ろうか、国立公園をどう造ろうか、国定公園をどう造ろうかというときに、西欧とは違った形で、日本の自然公園が造られていると思いますし、西欧とは違った美しい日本の自然公園の写真が、先ほど見せていただいたように撮れるという、そういう世界をつくっているんじゃないかというふうに思うんですけれども。それが、私、ちょっと注意して言ったつもりですけれども、途中で言葉がもつれていたかもしれません。実は、「そうであった」という言い方になって、それが今では必ずしもそういうふうに維持されていない。先ほどの、あの写真の最後のところにもお話が出ていましたけれども、維持されていない。

「維持されていないのはなぜか？」ということを考える上で、これも結論は申しませんけれども、今日は問題提起をさせていただいて、皆さんご自身で考えていただきたいんですけれども、南方熊楠が「鎮守の森を守れ」と言って、投獄までされて抵抗したというお話は、一部の方はご存じかもしれませんけれども、それは明治になって、鎖国の扉を開いて、西欧の文明が進んでいるのを見たときに、これはまあ、西欧の文明が進んでいるから、早く日本もそれに倣おうという考え方と同時に、清国みたいに侵略されてしまったら困るから、早く強国にならなければいけないという恐れと、両方からだったんでしょうけれども、「西欧文明に追いつけ、追い越せ」で日本の教育体制は作り上げられましたよね。今日、文科省の人がいらっしゃるかどうかわかりませんが、文科省をヨッコイショするわけではないんですけれども、100年たったら確かに西欧文明に追いつき、追い越しましたね、日本は。だから、やっぱり日本人は賢いんです。日本人は賢くて、そのやり方が必ずしも100%間違っただとは言えないんです。

だけでも、ここへきて起こっているいろんな問題というのは、そのシステムの中にあるということも、もう1つの事実なんですよね。そのことに関して、私、しばしば、このごろ特にユネスコの会議なんかに出て感じるんですけれども、ユネスコは教育・文化・科学ですから、科学の話をしていても、教育というのは必ずかかわってくるわけで、いろんなディスカッションをしているうちに、educationという言葉で議論をしているときに、我々は日本人ですから、「教育」という言葉で考えますよね。どこかで行き違いになるんです。これも字引の定義に従いますと、教育というのは「教えて育てる」ですから、教える主体が、教えられる客体を、主体の方向に導くことですね。Educationというのは、これは学校でお習いになってご存じだと思うんですけれども、draw upであって、「教えられる客体の能力を、どう引き上げるか」ということなんですよね。だから本当はeducationという言葉は、「教育」というふうに訳さないで、「学習」という言葉と対応させれば、もう少し、今起こっているようなさまざまな問題は、起きなかったのではないかと。

先ほど、ちょっとメモしたんですけれども、平山先生のお話の中で、「自然から学ぶ」という表現がありましたけれども、自然から学ぶことが必要であって、自然から教えてもらおうとだけしてはいけないんですよね。環境教育はしないで、環境から何を学ぶか

ということ、人々と一緒に考えるという姿勢が極めて必要なことじゃないかと思うんですけども、科学の立場から見ても、科学はますます発展して、人類の福祉に貢献しなければいけないと思うんですけども、その科学をどうマネージするかということに、我々がもっと責任を持たなければいけない。そのためには、すべての人が科学に常に注目する必要があると思うんですけども、そういうことから言っても、これからの開発ということに関して、そういう視点が必要かと思います。

そのために、先ほども、ユネスコは自然遺産ということを行いましたけれども、自然遺産とならんで biosphere reserve、生物圏保存地域というのがあります。日本でも、実は4カ所指定されているんですけども、皆さん、たぶん全然ご存じではないと思います。今日、お集まりの中で、4カ所を言える人がいたら、それこそ表彰ものだと思います。それぐらい知られていない。それは、まあ、我々にも責任があるんですけども。ですから、その4カ所とも、実は国立公園なんですけれども、その4カ所をパッパと紹介させていただいて、それでももう30分になってしまいますけれども、話を終わりにさせていただきたいと思います。

1つは、上信越高原国立公園の中に入っている、志賀高原の biosphere reserve。それからもう1つは、白山生物圏保存地域。これは白山国立公園の中に入っています。あとの2つは、単に国立公園に入っているだけではなく、大台ヶ原・大峰山のほうは、これは文化遺産ですけども、世界遺産に入っていますし、それから屋久島というのも世界自然遺産にもなっているけれども、生物圏保存地域です。もう一歩踏み込んで、生物圏保存地域が世界自然遺産と違うところを。いろいろと説明していったら長くなりますので、1点だけ申し上げますけれども、これはやはり単に保存するのではなく、その保存を通じて科学的に自然というものを解明して行って、それで自然の保全に寄与しようという部分が、もっと強く打ち出されています。その意味では、屋久島にしても、これらの生物圏保存地域にしても、いろんな人が研究しています。特に最近の保全生物学の研究対象として活用しているところがありまして、そういう貢献があることによって、日本人と自然とのつながりというのが、科学的な根拠も含めて、ますます強くなるということが、将来にも期待されると思います。

ということで、極めて雑駁なお話になりましたけれども、科学者から見た美しい日本の自然ということについて、一言コメントをさせていただいた次第です。ご清聴、どうもありがとうございました。

講演：田部井淳子氏

【司会】 ありがとうございます。それでは続きまして、今度は登山家の田部井淳子先生から、『世界の山々から見た日本の自然の魅力』というタイトルで、ご講演いただきます。田部井先生は、女性で初めてエベレストや、世界7大陸最高峰に登頂されたことで有名でもいらっしゃいます。現在も各地で、山岳地の環境保全の取り組みを行われている他、環境省の中央環境審議会自然環境部会の委員も務められています。では田部井先生、よろしくお願いたします。

【田部井淳子】 皆さん、こんにちは。田部井でございます。これから数分間、ちょっと頭をまったく別な世界に置いていただきたいと思います。私たちが、女だけでヒマラヤへ行こうと思ってクラブを作ったのは、1969年のことでした。そして女9人で1970年に、ネパールにありますアンナプルナ 峰という、7,555mの山に出かけたんです。これも非常に運がよく、天気にも恵まれまして、世界では2番目に登ることができました。その年は、帰ってから本を書いたり、そういうことで終わりにして、翌年、71年になって、「じゃあ、次の8,000mはどこにする？」ということになりました。

8,000m以上の山は、世界に14あります。その中で、「女だけでも登れる8,000mを選ぼう」ということになりました。男と女の体力的な差を、私はすごく感じていました。長いあいだ、男の人と一緒に岩登りをしてきて、その差を感じたのは、まずスピードです。歩く速度、走る速度、登る速度が違います。そして女の方が勝っている点というのは、1つのことをずっと持続することができる持久力とか耐久力、そして、なかなか物事をあきらめないという点では、女が勝っていると思うんですが、明らかに力とスピードは男が強いんです。ですからオリンピックをはじめ、いろんなスポーツにおいて、男と女は分かれて勝負を争います。

ところが山の場合には、男と女と分かれないうんですね。「ここは男の山です」とか、「ここは女の山です」なんて決まっていないうんです。まして「ああ、今年は女だけでエベレストに来る。じゃあ、ちょっと女向けに風を弱くしよう」とか、「雪を減らそう」とか、そういう温情というのがないんです。同じ条件の中で、8,000m以上の山に登るとなると、まずどこの山にするかということが問題だったんですが、やはりエベレストは世界で一番高いというだけで、私たち、山が好きなた者にとっては「一度は行ってみたい」という夢があったし、もう日本人が登っていて、身近に経験者がいる、資料もある、そして8,000mを越えてから、そんなに難しくないということで、私たちが「エベレストに登ろう」と決心したのが、71年の3月でした。

ところが世界最高峰の山となると、やはり世界各国から登りたい人が殺到しているんですね。もう72年も73年も、エベレストは予約でいっぱいでした。「じゃあ74年は？」と思ったら、世界の7カ国が競合したんです。特にスペインが、もう前々から74年を希望して、74年はスペインが許可をとってました。それで私たちに、その翌年、「75年な

らいいです」というネパール政府の登山許可が届いたのは、計画を出してから1年半もたっていました。そのことが今のエベレストと、70年代のエベレストの大きな違いなんです。もちろんタダでは登れません。登山料をネパール政府に支払わなければいけないんですが、私たちが登ったころの登山料は1,000ドルでした。36万円です。今、エベレストに登ろうとすると、ネパール政府に支払うお金は70,000ドル、850万なんです。しかも私たちが登ったころは、1シーズンに1チームしか登れませんでした。ですから、私たちが登っているときは、ベースキャンプに他の誰も入ってくることはできなかったんです。ところが今は、1シーズンに何チームでも入ることができるんです。もう今年も、10チーム以上がベースキャンプに入っています。登山隊が来るということがわかっておりますので、もう既に専門のシェルパの方たちがベースキャンプから、難しいアイスホールとか、ローツェ・フェースというようなところには、梯子(はしご)をかけて、ロープをかけます。そして、そこに登山隊がやってきます。もちろんその梯子を使います。タダではないです。その梯子をかけたシェルパの方たちに対して、使用料というのを払うんです。1チームが何千ドルという使用料を払いますので、今はベースキャンプから上まで有料道路になってしまいました。まさかこういう時代がくるとは、私は今から32年前、思ってもみませんでした。

私たち、女15人で出かけたわけですが、ベースキャンプは5,350m、氷の上でした。それから25年後、調査のために行ったときに、氷河がかなり後退していたんです。わずか25年で、エベレストの氷河があんなに変わるといって自体、私はものすごいショックでした。でも75年、32年前のエベレストですが、第1キャンプ、第2キャンプとキャンプを進めまして、第5キャンプがサウスコルと言われる、「死のにおいがする」と言われているところなんです。そこまでたどり着いた隊員は、15人のうち私だけだったんです。私とシェルパと、あとは報道関係の方だったんですが、ちょうどこういう形になっているんですね。(左手のひらを見せて、親指を示しながら)ここが8,000mのサウスコル。そこから、かなり急な、雪と氷と岩の混じったところを登って、ここにちょっとしたピークがあるんです。サウスピークと呼ばれるピークです。私たちは、このすぐ下、ほんの300mぐらい下のところに、最後の第6キャンプを張りました。

雪を、ちょうどテントの幅ぐらいに削り取りまして、四隅をスノーバーで打ち込んで、全部、テントごとザイルを、からげるんですね。まるで地下鉄がガーッと近づいてくるような、すごい轟音で風が吹いてきて、テントごと飛ばされたという隊がありますから、私とシェルパの2人しか泊まらないテントだったんですが、ザイルでギリギリにテントを固定し、私とシェルパはそこに泊まりました。やはり眠れないです。「明日の天気はどうか、登れるか」という、プレッシャーというんでしょうか。プレッシャーというよりは、「登らなければいけない」という、義務感とか、「選ばれたから行かなきゃいけない」とか、「女で初めてだ」とか、そういったことよりも、「ちゃんと生きて帰れるか」という、その心配の方が、やっぱり私はすごく大きかったので、9時に最終交信が終わって寝たんですけれども、時計を見ると11時。その次に時計を見たら11時20分。その次に見たら12時というので、結局は時計を見ただけで終わってしまうような夜でした。3時

に起きました。

寝袋の中に全部、靴下やなんかも入れておくんですが、酸素が薄いところだと、まず寝袋を出るだけでも大変です。ノロノロ、ノロノロと足を出しまして、中で温めていた靴下をはいて。それも一遍にはけないんです。半分ぐらい足を入れたら、また「ハーッ」と深呼吸をして、それからノロノロと靴下をはくという具合で、身支度に約2時間かかりました。もちろん雪を溶かして、ポットに入れるための紅茶を沸かして、というのもあったんですが、もう缶詰もガチンガチンでした。食べにくいと思ったので、固形のものを持っていかずに、果物の缶詰を持っていったんですが、それももうガチンガチンでしたので、なんとか食べられるように、それを火で温めながら身支度をして、5時50分にテントを出ました。

その当時の酸素ボンベは、なんと1本が7.5kgもあったんです。でもヒラリー卿が使った酸素ボンベは、1本が12kgだったんです。それから比べると、22年後の私たちが使った酸素ボンベは7.5kg。それでも2本背負うと、それだけでミカン箱1箱分の重さですから、15kgもあるんです。去年、マナスルに行って驚いたんですが、酸素ボンベの重さが、わずか3kgなんですね。非常に軽くなりました。その他にカメラを。カメラも8mmでしたけれども、あるテレビ局から「1台で動かなくなると大変だから、2台持っていけ」と言われたんです。で、「2台持ったよ」とは言いながら、1台は勿論、置いてきました。

というのは、あんなのは食えないですよ。食べられないものを持っていくよりは、やっぱりお水とかお湯を持っていったほうがいいと思ったので、8mmは1台。そしてカメラは、小さいカメラと大きいカメラこれは新聞社からお借りしたものを持っていきましたが、トランシーバーだけでも1kgありました。ですから頂上へ行くために、私は20kg近い荷物を背負って、シェルパと2人で出かけたんですが、前の日に、すごく雪が降りまして、もう出た途端に、太股までの雪なんです。それで、まず体ごと雪にぶつかって、膝で一回踏んで、それから足で踏んでという、3段階のラッセルです。それをシェルパと交代、交代でやりまして、南峰という8,700mに着きました。ここは、やっと2人が立てるだけの幅があるんです。そこまで来たときに、今まで使っていた酸素が本当に残り少なくなったので、ほとんどの隊が、その当時はそうだったんですが、そこで1本を置いて、新しい酸素ボンベに切り換えて、そして、頂上に向かったわけです。

その南峰から頂上の間というのは、本当に悪いところでした、今でも夢を見るんですけども、一度、ガクンと下りるんですね。この下りるところが、本当にオーバーではないんですが、ナイフリッジ(knife ridge)というところで、むずかしいところです。しシェルパも私も「一步もミスしてはいけない」という、本当に私自身も生まれて初めてでしたが、このヘルメットの下で、髪の毛がウワァーッと、もう逆立っていくような感じでした。

そこから、さらにヒラリーのステップと呼ばれる岸壁を登ります。それが、かぶり気味なんです。それがすごく嫌なんです、今は、そこは全部ロープが付いているので、そういう心配はないので、これから行く方はご安心ください。

このヒラリー・ステップというところは、ほんの3mぐらいなんです、最初の出だしがすごく悪いんです。私もそのときに、「ここ、どうやって登るんだろう？」と思ったんです。もう本当に、登ることも心配でしたが、「だけど登ったあと、どうやって下りるんだろう？」という、下る心配がものすごく強かったです。「でも過去、ヒラリーさんが登ってから私が行くまで、37人の人が歩いているんだから、必ず何か下りる方法はあるんだ」と思いました。「今はとにかく登らなきゃいけない。下りるときは、そのとき、一番いい方法を考えよう」と思ったんです。で、とにかく夢中で登りました。

そこを越えると、あとはすごい雪稜が続いているんですね。一步、一步が本当に苦しい。アイゼンの爪3cm分ぐらいまで足を持ち上げたら、あとはもうズルズル、ズルズルと引きずるような格好で歩いていました。でも「一生これをやっているんじゃないんだ。必ず終わるときがくる。だからこの一步を頑張ろう」と思って歩きました。ですから、向こうにチベットの山々が見えてきて、「ああ、ここが頂上だ」とわかったときには、「やった、やった！」とか、何かこう、感動したとか、そういった気持ちは本当になくて、「ああ、もうこれ以上歩かなくていいんだ、登らなくていいんだ」という、気持ちでした。

ネパール側からと、中国側からと、本当にせり上がってできたような頂上でして、本当に狭いところです。私とシェルパの2人だけです。雪を幅70cmぐらい、両足で広げて立ってられる幅に、長さ1m半ぐらい、雪を踏み固めて、そこにピッケルを根本まで差し込んで、お互いに写真を撮り合いました。ネパール側は、マカルーからローツェ、ヌプツェ、プモリ、そしてチョー・オユー、ギャチュン・カンと、本当に名だたる8,000mの、雪と氷と岩でできた、素晴らしい山並み。ところが反対のチベット側は、本当に起伏の緩い、茶色と白の果てしない大高原が、ずっと広がっていました。そのときに、「ああ、これがチベットか。今まで、本でしか見たことのない世界が、これなんだ！」というふうに思いました。でも非常に無機質な感じの風景だったんですね。で、「もう一回、行きたいか？」と言われれば、行きたいとは思いません。それがエベレストでした。

それから15年後、南極へ行きました。

第一步を南極にしるしたとき、「やっぱりすごいな！」と思ったのは、氷の厚さが2,000mという、その氷の存在感です。見渡す限りの大氷原。盛り上がりが見える地平線が全部、氷なんですね。南極の大きさというのは、日本の37倍あるわけですが、その大部分は氷に埋まっています。氷の一番厚いところは4,000mの氷で埋まっているわけですが、それを全部平均化すると、約2,000mということになります。そこからさらにセスナ機に乗り換えてベースキャンプに入っていくんですが、そのセスナ機の上から見下ろした南極大陸、本当に美しいです。もう何万年も何十万年も、人間も生物も、誰も歩いたことのない、あの雪、氷。これはもう本当に美しく、清潔だとか、清らかだとか、荘厳だとか、そういった言葉を越えた美しさというんでしょうか。

私は、あんまり宗教心というのは持っていなかったんですが、あの風景を見たときに、「ああ、神様というのは、いるのかも知れない」とさえ思いましたし、私たちは、生き

ているということよりも、むしろ「ああ、生かされているんだ」という、そういう気持ちになりました。「こんな美しい風景を見たんだから、これから先、自分にどんなにつらいことがあっても、どんなに苦しいことがあっても、この風景を思い出して切り抜けていこう」と思えるほど、本当に美しいところです。ベースキャンプは2,400mの高さなのですが、気温はかなり低く、空気は、うんと乾燥している。だから降ってきた雪は、あの結晶が溶けないで、そのままの形で残っているんです。一步、私たちが足を踏み入ると、すごく軽いですから、フワァッと雪が舞い上がるんです。それが風に乗って飛んでいく。また途中から、ヒラヒラ落ちてきます。

私たちが行った日本のお正月というのは、南極では太陽が沈まない時期で、横に移動していています。ですから真夜中の1時でも2時でも、燦々と日が差しています。それが雪の結晶に当たりますと、ちょうどプリズムのようになって、キラキラ、キラキラ、輝きながら、自分の目の前をヒラヒラ、ヒラヒラ、落ちてきます。それがフワッと雪原に乗っかると、果てしない大雪原は、もう結晶だらけ。それがキラキラ、キラキラ、輝いていて、まるでダイヤモンドの上を歩いているような、本当に美しいところです。「ああ、こんな美しいところを、やっぱり汚してはいけない」という、そういう気持ちが自然に湧いてきまして、私たちは、ゴミはもちろんですけども、排泄物も含めて持って帰りました。これは本当に難しいです。小のほうは、しょうがなかったです。それで大のほうだけを持って帰りました。

雪のブロックを作って四角に囲い、そこにプラスチックのバッグを入れて、大のほうをするんですが、それは全部、橇（そり）に付けて持って帰ってきました。でも、これも陶器のような、本当に美しい山々ですが、さっき平山先生もおっしゃったように、ものすごく乾燥したところ。「もう一回、行きたいか?」と言えば、「もういいです。料金も高いから」というのが、理由ではありますけれども、本当にそういう世界を見てまいりました。

どんな小さな国の、どんな低い山でも、その国の最高峰があると思い、今、各国の最高峰というのを目指しているんですが、国連に加盟している国だけでも192カ国あるんですね。そのうち登った国の最高峰は、まだ53カ国しかないんです。今年は4月に南アフリカの最高峰、マファディ山という、3,446mの山へ行ってきましたが、驚いたのは、どの沢の水も飲めるということです。あの大サバンナ、草も木もなんにもない岩山、そこを3日間歩いて、やっと頂上にたどり着くというような、そういう山だったんですが、これもすごく広々とした大テーブルマウンテンでした。

そして7月・8月はアルメニアの最高峰とグルジアの山へ行き、今週、バルト3国の、最高峰と言っても非常にかわいらしくて、リトアニアの最高峰が294m、ラトビアの最高峰が312m、エストニアの最高峰が318mという、大変かわいらしい山だったんですが、そこを登って、火曜日に帰ってきました。そして、その日のうちに福島に移動して、10日に磐梯山に登ってきました。素晴らしい紅葉でした。本当に「惚れ惚れするような」というんでしょうか。先ほど、森田先生の写真で、もう皆さんも堪能されたと思うんですが、翁島のほうから登って、八方台に下りたんですけども、1,500mから上は本当に

素晴らしい紅葉で、今がちょうど見ごろです。明日、お出かけいただければ、それが証明できるかと思うんですけども、この日本のきめ細かい、多種多様な植物、生物、そういったものを見ますと、私は日本に生まれて本当によかったと思います。

そして、この日本の美しい自然公園の中で、小さい時代を過ごしたということが、私の今の山好きをつくっているのかなと思いますので、小学校のときに山に連れていってくれた先生にも、すごく感謝していますし、こういった本当に美しい国に生まれたということにも感謝しています。もう時間ありませんので、この後のパネルディスカッションのときに、また補足させていただきたいと思います。以上で私の話は終わりです。

【司会】 田部井先生、どうもありがとうございました。それでは、ここで10分間の休憩を挟ませていただきます。

(休憩)

パネルディスカッション

【司会】 皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、パネルディスカッション『国立公園に期待するもの』を開始いたします。さっそくパネリストの方々をご紹介します。皆様から向かって右側から、環境省大臣官房審議官・黒田大三郎さんです。黒田審議官は、昭和50年に環境庁に自然保護系の技官、いわゆるレンジャーとして入庁され、吉野熊野国立公園、大雪山国立公園など、現地でのレンジャー勤務と、本省野生生物課や国立公園課を歴任されており、現在は自然環境局担当の審議官をされています。

そして、そのお隣は、先ほど『世界の山々から見た日本の自然の魅力』と題して、ご講演いただきました、登山家の田部井淳子先生です。田部井先生は、女性で初めてのエベレスト、世界7大陸最高峰登頂者として有名であり、現在も各地で山岳地の環境保全の取り組みを行っていらっしゃいます。そして、そのお隣は、同じく先ほど『日本の自然の科学的価値』というテーマで、ご講演いただきました、植物学者の岩槻邦男先生です。岩槻先生は植物分類学がご専門で、東京大学教授、放送大学教授を歴任され、現在は兵庫県立人と自然の博物館の館長をされています。

そして最後に、コーディネーターをお願いいたしました、東京農業大学教授の熊谷洋一先生です。熊谷先生は造園学がご専門で、東京農業大学の教授、兵庫県立淡路景観園芸学校の学長をお務めの他、環境省の中央環境審議会自然環境部会の部会長としても、ご活躍されています。では、ここからの進行は、コーディネーターの熊谷先生にお願いします。よろしくお願いたします。

【熊谷】 はい、かしこまりました。それでは、ただいまからパネルディスカッションに入らせていただきます。本日のテーマは『国立公園に期待するもの』ということでございますが、これまでに平山先生の基調講演から、素晴らしい森田先生のスライドショー、そして科学的な見地から岩槻先生のお話、そしてまさに目を見張るような登山歴をお話いただいた田部井先生、そして、これらに黒田審議官にお加わりいただいて、ほんの短い時間ですが、1時間の時間を使ってシンポジウムを、パネルディスカッションという形で続けたいと思います。まず最初に、国立公園とはどういうものかということについて、黒田審議官のほうから、お話をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

【黒田】 黒田でございます。それでは私のほうから、国立公園の現状とか、仕組みとかを、手短にご紹介させていただきます。その前に、まず今日は 自然公園法50周年記念シンポジウム ということで、たくさんの方々においでいただきまして、ありがとうございます。環境省の1人として、本当に感謝申し上げます。

では国立公園の話に戻ります。今、画面にも出ていますけれども、現在、わが国には29の国立公園があります。お手元に『日本の国立公園』というパンフをお配りしている

と思います。これの最後のページに地図がございます。これにも載っていますので、またあとでよく見ていただければと思います。全部を挙げるとキリがないので、北のほうで言うと、利尻礼文サロベツ国立公園とか、知床国立公園というのがありますし、日本の真ん中あたりに中部山岳、あるいは上信越高原といった山の国立公園があります。さらに南を見ると、南の島々の西表国立公園、あるいは小笠原の国立公園。こういうふうに、日本を代表するさまざまなタイプの風景とか、あるいは自然環境を有する地域が国立公園になっています。

29の国立公園の陸地の面積を全部足し合わせますと、200万ヘクタールぐらいです。日本の国土、陸地の5.5%ぐらいになります。大きさを比較すると、この東京都全体の10倍ぐらいの広さになります。国立公園が世界で初めて生まれたのは、19世紀後半のアメリカでございます。その後、多くの国々で、いろんな国立公園がつくられてきました。ただ、同じ国立公園という言葉を使いますが、それぞれの国で、同じ名前であっても、国立公園の性格であるとか、制度というのが、少しずつ異なっていて、特徴を持っています。

そういう意味で、日本の国立公園は、仕組みとしては環境大臣が一定の地域を指定すると。こういうやり方なんです。国有地だけではなくて、県や市の公有地や民有地、こういうものも含んで指定すると。こういう方式を取っているのが特徴でございます。いわば土地所有に関係なく指定する制度でございます。国立公園専用の国有地になるアメリカの国立公園などとは、だいぶ性格・制度が異なります。こういうことを覚えていただきたいと思います。

今年は、自然公園法50周年記念ということで、日本の国立公園の歩みを振り返りますと、けっこう長い歴史を持っています。自然公園法の50年という歴史を超えて、それ以前に指定された国立公園が数多くございます。鴨下大臣の挨拶の中にもありましたけれども、自然公園法の前には国立公園法という法律がございまして、この国立公園法に基づいて指定された第1号の国立公園は、昭和9年に指定されています。一方で、最も新しいというか、若い国立公園は、つい最近、この8月の末に指定され、誕生しました尾瀬国立公園ということになります。

国立公園は、美しい自然と豊かな自然環境を保護して、同時にその風景や自然に触れ親しむ、そういった利用を進める地域とすることができます。風景や自然を保護するために、国立公園の区域内では、例えば建物を建てたり、土地の造成を行う、こういったことをするときには許可が必要であると。こういうような仕組みになっています。1つの国立公園の中でも、自然の質が高いとか、重要な、まあ核心部といいますか、そういうところでは、例えば許可の基準を厳しくして、厳正な保護を図るといようなことで、保護の仕方に強弱をつけて、その保護を図っているところです。

また国立公園というのは、人もたくさん住んでいるわが国の中で、自然が大きくまとまって残されている地域です。そうしたことから、最近では、わが国の生物多様性の屋台骨としての役割というものが、非常に大きく期待されていて、そういう役割を果たすことが求められています。このために、国立公園の中でも、例えば植生の復元であると

か、自然再生といった積極的な保護対策というものにも、力を入れて進めるようになってきました。

一方で、国立公園の利用の状況ですが、国立公園を訪れ、利用する人々の数は、年間延べ3億5,000万人ぐらい。美しい風景を楽しむとか、あるいは温泉地で過ごすといったような形の利用が中心ですけれども、最近はエコツアーであるとか、カヌーといったような、自然の中ならではの活動も盛んに行われるようになってきています。このような国立公園の利用のために、例えば登山道を整備したり、キャンプ場、あるいはトイレをつくったり、それから自然を解説するビジターセンターなどの整備に、私ども環境省や地元の自治体なんかが一生涯懸命に取り組んでいるところです。

こういう国立公園を、いろいろな制度や事業で保護したり、利用を進めたり、という取り組みをしていますが、環境省では、こういう国立公園の保護などにあたるために、自然保護官など、約300名の職員を地方に配置しています。そして国立公園や、あるいは中には野生生物の保護という分野を担当する職員もいますが、この自然保護官の最もウェイトの大きな仕事というのは、地元の自治体や土地所有者、あるいはそこに住んでいる方々、NGO、そして研究者の皆さん、こういったさまざまな方々と連携して、国立公園の保護を進めながら、またそれとバランスがうまく取れるような形で利用を進める。こういうことが大きな仕事になっており、言い方を変えますと、現地でのコーディネーター役として、みんな頑張ってくれています。こういうふうに、いろんな方々と一緒になって保護と利用を進めるということですが、国立公園に関係のある人たち、あるいは関心を持ってくださる人たち、こういう方々と一緒になって国立公園をつくり上げ、運営していくこと、こういう形で国立公園をうまく生かしていくことが、やはり日本の国立公園の大きな特徴だと言えらると思います。

まだまだ国立公園についてお話ししたいことは、たくさんありますけれども、そして、駆け足の紹介になってしまいましたけれども、私たちは、「国立公園に、たくさんの人たちが足を運んでくだされば」と、こういうふうに思っています。そして今日、ここにお越しいただいた方々には、今、私が少しお話をしましたので、次に国立公園を訪れるときには、国立公園そのものの見方というのを少し変えて、また国立公園の風景や自然を楽しんでいただきたいと思います。宜しくお願いします。どうもありがとうございます。

【熊谷】 ありがとうございます。黒田審議官は、審議官になる前に、現地の国立公園の管理を実際におやりになったり、レンジャーの経験も豊富ですし、自然環境行政全般を今まで担当されてこられたので、大変要領のよいご説明を受けたと思いますが、果たして皆様、おわかりになったでしょうか。実は私も最近、ちょっとびっくりしたんですが、このシンポジウムがあるということで、学生の1人である、大変若くて美しい女性の学生さんに、「君、国立公園を知っているかね？」と聞いてみました。何も言わないものですから、「国立公園へ行ったことがある？」と言ったら、即座に「私、行ったことない。国立公園も知らない」と。大学の学生さんですよ。

それで「じゃあ君、日光へ行ったことはある？」「行きました！」「それは国立公園だ

よ」というふうに話したんですけど。「じゃあ、どこの生まれ?」「岡山。海の近くです」「じゃあ瀬戸内海を見たら。瀬戸内海も国立公園だよ」というふうに言ったんですけど、まだ怪訝な顔をしていました。今日、来られている方は、今のご説明でだいぶわかりになったと思いますけど、国立公園って、本当にご存じなのかどうか。そのことも、ぜひ私としては、今日お帰りになるまでには、ちゃんと知っていただきたいなというふうに思います。それと、今ご説明いただいたのは、日本の国立公園ですが、ここでぜひ海外のご経験豊富な田部井先生から、海外の国立公園を絡めて、国立公園についてお話しただいただければと思いますので、ひとつよろしく願いいたします。

【田部井】 「私自身が全国というか、全世界を歩いているわけではなくて、国立公園に関して深い知識を持っているわけではないんですが、やはりアメリカとか、オーストラリアとかと違うなと思ったのは、公園専用の広い公園にはパークレンジャーという方たちが馬に乗って、管理しており何度も見回りにきます。やはりクマも出ます。

まず入る前に「この公園では、こういうことは守ってください」という、そういったことを、日本人が多いところでは、日本語のビデオでも教えてくださる。そういったシステムがしっかりしているなということは何度かありました。でも日本でも、もちろんビジターセンターの中では、そういった指導もたくさんされているんだと思うんですが、今聞いてびっくりしたのは、3億5,000万人もの利用者があって、日本の自然保護官というのは300人ということだったので、この数が、やっぱり外国と日本の大きな違いかなというふうに思いました。

【熊谷】 ありがとうございます。それでは引き続きまして、パネラーの岩槻先生から、先ほどのお話で不十分な点も、もしおありでしたら。ちょっと時間の制限がございましたので、言い足りなかった部分がおありでしたら、お話ししたいのと、それから先生のお考えになっていらっしゃる国立公園について、お話しただいただければと思います。よろしく願いいたします。

【岩槻】 日本の国立公園は、美しい日本の自然の象徴みたいなものだと思うんです。国策課題として「美しい日本」というような言葉が言われる前から、私は日本の自然というのは、世界のどこよりもと言えるかどうかわかりませんが、最高級の美しい自然が維持されていると思っていますし、それは明治までかもしれませんけれども、われわれのご先祖様たちが、そういうふうに自然と共生する生き方をしてきたから、そういうものが保たれていたという側面がある。そういうふうに私たちに恵まれたものを、私たちよりも次の、あるいは次々の世代にまで、私たちが今エンジョイしているのと同じような形で維持できる、そういうシンボルとして引き継ぎたいものだと思うんですけれども。

ただ、それはきれいな状態で守っておくというだけではなくて、1つは、先ほども言われましたように、その美しい自然を十分味わう場として使わせていただけることとし

てですし、私どもの立場からしますと、やっぱり研究の場としても、自然の状態が維持されているということが、自然を知るという意味では一番基本的なことなので、非常に大切な、宝庫であるという言い方ができると思うんですね。それも、先ほどもちょっと申しましたように、国立公園というのを国が指定して、国がいろいろ面倒をみてくださるといのは、これは非常に大切なことだと思うんですけども、しかし一般市民の立場から言いますと、与えられた形で教えられて、「ああ、こんなにきれいなのか」と思って見るというの、やっぱりあんまり人間らしい事ではなくて、人間というの、やはり自主的に美しさを自分で発見して、それをエンジョイするものだと思うんですね。

その意味で、国立公園と知っていても、知っていなくても、いいかもしれませんけれども（笑）美しい自然をいかに自分のものとして味わい、その値打ちを知り、だから、それから何かを学び取ろうとするという、そういう姿勢がどんどん広がっていくことが、美しい日本の自然を維持することでもあり、それを尊ぶことでもあるというふうに思うんですけども。そのことは、もう既に言われているように、今日お集まりの皆さん方、「そんなことは当然だ」と思っているかもしれないけれども、日本人全体から言いますと、先ほど熊谷先生が言われたように、必ずしもそういう意識が今、高いとは思われません。

こういう機会にもう一回、そのことを考えたということ、まず近隣の方に。今晚、帰って、夕食を食べながらでもいいですけども、まず近隣の方、自分の周辺の方から、国立公園というようなことを話題にさせていただくとか、日本の自然の美しさを話題にさせていただくとか、そういうことで広げていただいて、日本中のすべての人が、こういう自然をエンジョイし、かつその価値を認識していくということが極めて大切なことだと思いますので、今日お集まりの方々にも、そういうことを一緒に考えていただけたらというふうに思います。

【熊谷】 岩槻先生は科学者として、そして教育者としてのお立場ですので、自然公園、国立公園、そういった美しい景色を楽しむだけではなくて、きちっとそこから得るものを得るという言葉だと思うんですが、特に私、ご講演の中でも非常に印象に残ったのは、今、皆さんも軽く使っている「環境教育」という言葉は、必ずしも適切な場合だけではない、「環境学習」だというふうにおっしゃいましたよね。つまり環境とか自然に学ぶとか、教わるということが大切であって、それを教え込もうとか、あるいはそれを教育してやろうとかいうことは、必ずしも人間、いわゆる生物としての人間、あるいは人と人としての人間、つまり人偏のほうの人間、漢字の人間、こういうお話は、最初の平山先生のお話と非常に通じるころがあって、自然公園というの、また新しい価値が出てきているのかなというふうに思います。

それで、もう1つお聞きしたいのは、岩槻先生、今、非常に他の自然環境全体にかかわる話題として、生物多様性ということが言われておりまして、日本も非常にそういう大きな役割を、今、世界で果たさなければならぬというようなことが言われていますが、生物多様性の専門家として、何か国立公園との関係でお話をいただけたらと思いま

すが、いかがでしょうか。

【岩槻】 実は、今日のこれを控えて、昨日、IPCC とゴア元副大統領がノーベル平和賞を受賞されるというニュースを聞いて、両面からの感想を持ちました。1 つは、こういことがノーベル賞で顕彰されることによって、より広く一般の人々にも認知されるようになることは、極めて大切なことなので、この時点で非常に有効であったということです。もう1 つは、ノーベル平和賞でこういことを顕彰しなければいけないほど、今の地球は貧弱になってしまったのか、私たちの世代というのは、それほどひどいことをしているのかという、そういう面と、2 つの意識を非常に強く持ちました。

日本でも地球温暖化は、非常に大きい話題になっています。特に京都議定書が世界をリードするという議定書であったこともあって、非常に強く言われているんですけども、「地球温暖化だと何が悪いのか？」と一般の人に聞きますと、あまり正確な答えが返ってこないんですね。ご存じのように、京都議定書は、アメリカは脱退しました。これは、科学の世界の代表者であるアメリカのアカデミーが、「温暖化が二酸化炭素の増大と結びつくとは、まだ科学的に証明されていないじゃないか。だから、それで大騒ぎするのは問題だ」と。そういう理由をつけて脱退したというのが、1 つの理由だったわけです。

それを IPCC が、非常にきっちりと量的な統計値を高められて、それでさすがのアメリカの科学アカデミーも、これだけの傍証が整ったら、「これは無関係だとは言えない」と。まだ「証明された」とまでは言っていないそうですけれども、「無関係だとは言えない」というので、京都議定書にもう一回、取り組み直さなければいけないと。京都議定書以後ですか、要するに地球温暖化の問題に取り組まなければいけないということも、アメリカも参加するようになってきたということなんですけれども、今言いましたように、温暖化で、例えば東京圏が、グレーター東京は海の底に沈んでしまう、というようなことが言われますけれども、今の科学技術をもってすれば、オランダなんかは、海の底が国土の非常に広い面積なわけですから、明日、明後日の問題ではないですから、そういことが実際に起こるまでに、それを防ぐぐらいのことは、できなくはないわけですね。

だけども地球温暖化で決定的に困るのは、生物多様性が壊滅的に影響を受ける。今日、今、話題になっています、例えば国立公園の、先ほどの写真で見たような美しい景観というのは、はなはだしい影響を受けるということは、これはもう明らかなことなんですよね。ところが、実は生物多様性に関与しているものというのは、IPCC のような形で、一般の人に、「いかに生物多様性に恐ろしい影響が出てくるのか」ということを説得するデータをまだ持っていないんです。それは生物多様性という現象そのものが、多様であるという現象ですから、科学的に普遍化して語るということが、非常に難しい現象なので。一生懸命に言い訳をしているわけではないんですけれども、それは科学的に実証することが非常に難しい現象なんです。

ただ、そのうちで唯一といえますか、今、比較的量的に評価ができるようになってい

るのが、絶滅危惧種の問題なんかです。日本はそのことに対する対応は、非常にきっちり、まあ自分がコミットしているから言うわけではないんですけども、進められていると思うんですけども、実は15年前に種の保存法ができたときには、まだ非常に怪しい状態だと思ったんですけども、モニタリングが進むにつれて、まあ細かいことまでは申しませんが、対応さえすれば、非常に危険な状態は防げるということが見えてきて、こういう問題は国策もきっちり立ててもらわなければいけないし、これが非常に悪い状態から、少し悪くない状態になってきているというのは、やっぱり一般市民に認知されてきたことが非常に大きい要素だと、私は評価しているんですけども、そういうことが、もっともっと進めば、いいのではないかなと思うんですけども。

そういう意味で、ノーベル賞がIPCCに与えられたというような機会に、実は、それは「国立公園の美しい自然を守りましょう」ということにも通じているんだという、そこまで話を、やはり関連させて考えていただければ、今日のシンポジウムと昨日のニュースとが、非常にきっちり結びつくのではないかと思いますし、生物多様性の問題に対する考察を深めていくことになるかと思しますので、ちょっとコメントさせていただきました。少し長くなりすぎてしまいました。

【熊谷】 ありがとうございます。ご専門ですので、大変詳しく、また最新の情報をありがとうございます。先ほど、森田先生のスライドで見せていただいた、あの風景は、確かに多様ですよ。ですから、ああいう美しい、多様な風景を持っている国立公園を守ることは、結果的に生物の多様性を守ることにつながる、というふうに理解してよろしいでしょうか。それでは田部井先生、海外の方は、日本の国立公園をどういうふうに見ているか、あるいは海外の方は、自分の国の国立公園をどのくらい愛しているのか、知っているのか、あるいは知らないのか、その点から何かお話しいただければと思います。

【田部井】 非常に残念ですが、カナダとかアメリカでは、公園に対する意識はすごく高いと思います。カナダとかアメリカは、わりと日本のことを知ってくださる方は多いんですが、このあいだ行きましたアルメニアとか、グルジアとか、南アフリカの方たちに、「日本のことで何を知っていますか？」と聞きましたら、総理大臣の名前を言えた人は、誰もいませんでした。でもその中で、私が「すごいな」と思ったのは、なんと「フジヤマ」という言葉が出てきて、「あっ、日本と富士山っていうのは、やっぱりすごく密接な関係があって、日本を意識するとき、富士山を意識されるんだな」というのは、ちょっとうれしく思いましたけれども。そういった点では、公園に対する意識というのは、外国人が非常に強いんですが、「日本にどれだけ国立公園があるか」ということに関しては、ほとんど知らない方が多いんですね。

でも去年、私が非常にうれしく思ったのは、北アルプスを縦走してしまっていて、7月の初めでしたから、人はまだ多くは登っていませんでしたが、燕から槍まで縦走していきましたら、槍の小屋に、なんとアメリカ人が11人泊まっておりました。その他には私

たちだけで、日本人は誰もいなくて、アメリカの方に、「どういうふうにして、ここの公園を知ったんですか？」と聞きましたら、やはり日本の本、インターネットでなくて、個人的な友人から、「日本には富士山ももちろんあるけれども、それ以外にも美しい公園がいっぱいあるよ」ということを聞いてやってきた、ということを知りまして、もっともっと、この日本の美しい国立公園をPRしていきたいなと思いました。

またカナダのバンフというところでは、毎年、ブックフェスティバルというのが行われているんですが、そこでは、なんと日本の本が本当に無いんですね。もうこれが私は、とても悲しいんですけども、日本のカメラマンが撮った、美しいヒマラヤの写真集というのはあるんですが、なんと日本の美しい自然の写真がないというのは、当に残念で、先ほど見た、美しい森田先生の写真を、ぜひそのブックフェスティバルに出したい。これには皆さん、全国民がお金を出してもいいんじゃないかと思うぐらい、熱い思いを持っております。ぜひ紹介していきたいなと思います。外国の山に行くことによって、私は日本の美しい自然の公園というのを再認識しています。今は本当にこのPRのために、歩く国立公園の宣伝マンをやろうかと思っているぐらいなんです、この美しい日本の国立公園を外国にも、日本の国民にも知らせたいという熱い思いです。

【熊谷】 ありがとうございます。会場におられる森田先生、ぜひパスポートを取って、世界へ写真集を売り込みに行っていたらと思います。それでは、この辺でまた環境省の黒田審議官のほうから、環境省としては、今後の国立公園について、どんなふうにご考えておられるのか、少しご意見、あるいは何か話題を提供していただければと思います。よろしくお願いたします。

【黒田】 今、田部井さんから、日本も大したものだから、宣伝マンになってくださるということで、大いに期待をしたいと思います。自然公園法が生まれて50年、それぞれの国立公園はもっと長い歴史を有するものもありますと、さっき言いましたけど、正直言って、「ちょっと国立公園というようなブランド名に胡座(あぐら)をかいていたところがあるのかな」と、こう思っています。一方で、「日本をもっと売り込もう」と。これは環境省だけではなくて、政府全体でそうしようということで、ビジット・ジャパンというようなキャンペーンがあったりします。

そういうこともあり、非常に政府全体というか、そういう意味合いで日本の国立公園というのは、ここのところ急速に高く期待されております。どうも「日本食のお寿司が流行っている。それに負けるな。国立公園、頑張れ！」と。こういうような叱咤激励を総理官邸からも受けておられて、今回、その『日本の国立公園』というパンフレットと、『日本の自然』というパンフレットをお配りしましたけれども、あれは実は、私どもの取り組みとしては初めてですけども、日本語版だけではなくて、それに応じた形で英語のもの、2種類の中国語、それから韓国語のものというようなことで、少しそういう対応を、田部井さんに背負っていただこうかと、こういう中身を作ったりして、あらためて見ると、世界の方々に日本の自然を代表する国立公園をもっと知ってもら

らおうということを、一生懸命にやらなければいけないというふうに思っています。

ただ、もう1つは、あらためて考えると足元で、まずは皆さんというか、我々というか、もう日本の中で、やっぱりもっと知ってもらわなければいけないし、それは何よりも、例えばカナダやアメリカで、パークレンジャーがたくさんいて、いろんな紹介をする仕組みがあるのに、日本はちょっと足りないのではないかと、というご指摘もありましたけれども、そういうところから、しっかりやっていかなければいけないというふうに思っています。

「最近、何を考えているのですか？」という熊谷先生のご指摘がありました。十分な答えになるかどうかわかりませんが、自然公園法50年というような1つの節目を迎えて、やっぱり、ちょっと今までのことも振り返りつつ、次のステップを踏み出すいい時期かなと思っています。それは、例えば今、29の国立公園があるわけですがけれども、これがおかれている状況というのは、広く言うと、古い国立公園は、人間で言えば古希を迎えます。70年もの歴史があって、そのあいだに日本の国土は大きく変わっているわけです。そういうことがそもそもあって、そういう中で、昔は当たり前だった、要は価値として、あまり認められなかった自然も、だんだん減ってきて、大事だと言われているような、例えば里山なんていうのは、そういうものだろうと思いますけれども、そういうものも、しっかり評価をする。

そして、例えば29の国立公園がありますけれども、「そういうものの何が日本の代表選手なんだ」というような意味合いを、もう一度、よく見てみる必要があるのではないかと。われわれの側だって、自然を見る目がずいぶん変わってきて、70年前は、きっと自然の美しさを伝えるのは、文字で伝えるか、あるいは絵葉書か何かで伝えるしかなかったんですね。今は、ものすごくこう、それこそ写真家の腕も上がり、あるいは機材もよくなって、動物の映像とか、花の写真とかも含めて、いろんな情報が入るようになってきて、見る目、あるいは認識、関心というものも変わってきています。

それから岩槻先生をはじめ、学者さんというか、研究者の皆さんの、いろんなご努力で、自然に関する情報というのは、ものすごくたくさん集まってきて、いろんな知見が得られるようになってきているし、そういうものをコンピュータの地理情報システム、GIS というようなものを使って、いろんな料理の仕方もできるようになっているので、そういうものを土台にして、先ほど言いました通り、「どの国立公園は、なんで立派なんだっけ？」というのを、もう一回整理したり、もう僕は、場合によったら、そういう分析の中で、「新しい国立公園を造ったほうがいいよ」というところもあったり、中には、「国定公園じゃなくて、これはやっぱり国立公園じゃない」とか、「新しい国定公園もいいんじゃない」というような所が、だんだん発掘できてくるのではないかと思います。そういうのを、これからしっかりやるべきかな、というふうに思っています。

それからもう1点、「じゃあ、1つ1つの国立公園をどうするんだ？」と。それは指定すればいいだけではないので、しっかり保護しながら、うまく使っていくことが大事だろうと。環境省の職員の数を決して多くありません。アメリカなんかと比べると、もう圧倒的に少ないんですけれども、アメリカはやっぱり国立公園の専用の場所ですから、

国立公園局というのが、内務省という役所の中にあるんですが、その人たちがやらなければいけないんですね。われわれは、いろんな人たちと一緒にあって、共に働くというか、協働ということで、いろんな方々の知恵と力を借りながら、国立公園の運営をしてきているわけですが、そういう意味からすると、実は関わっている人は、アメリカより多いのかもしれないと思っています。

そういうのが単に多いから偉いんだということではなくて、うまく一緒になって、それぞれの国立公園を磨いていって、最近、生態系サービスというような言葉もよく使われますけれども、国立公園サービスというものを磨き上げて、売り物にして、皆さんにも提供し、地域の方々と一緒になって、そして訪れる方々にも、ある意味、一緒になって参加していただいて、その地域の魅力として自然を守り、伝えていって、それでその地域が元気になる。地域の誇りになり、また国の誇りにもなるようにしていければと、こんなふうに思っています。長くなりましたけれども。

【熊谷】 ありがとうございます。ずいぶんいろいろ、たくさんの意気込みをお聞かせいただいて、何か心強いような、不安なような気もしますけれども（笑）。私が学生の頃、40年以上前ですけど、その時、森林の有名な先生から、「日本の山の（森林の）総蓄積量は19億立米（りゅうべい）だ。よく覚えておけ。今のままでいくと、20年かそこらすると半分か、ほとんどなくなってしまおう」というふうに教わったんです。偉い先生から教わりましたから、ずっと信じてきて、この前、日本の森林の総蓄積量はいくつかということを知りましたら、23億立米だと。増えているんですね。ですから、そのくらい日本の状況は変わっています。

それから私が学生のころ、造園の先生が「日本の国立公園は23個だよ。こんなにあるから、もう絶対に増えん」と。そのあと、あっという間に28個になって、今年、もう1つ増えました。29個ですから、たぶん30の大台に乗るんじゃないかと。ですから、そういうふうに、ずっと変わってきているんですけど、ただ1つ、私の専門から言いますと、私は造園学ですから、デザインとかそういうことに興味があるんですが、1つだけ変わっていないのは、40年前も今も日本中の国立公園に行って、国立公園の中に入っているのに、自分が今、国立公園の外なのか、中なのか、わからないんですよ。

つまり本当に日本を代表する国立公園であれば、その中に入ったら、その景観が、例えば中にあるガソリンスタンドだって、デザインが変わっていったっていいし、それから、楽しむ場所だって、「あっ、ここの中は国立公園だな、本当に」と思うような休憩舎が建っていたらいいし、あるいはその中で住まったり、仕事をされている人たちも、本当に日本を代表する風景の中で仕事をしているんだと。こういうふうな様（さま）になっていけば、国立公園だとわかるんですけど、ずっと、どこも全部国立公園なのか、いつ出たのかわからない。車で通っても、いつ入ったのかわからない。看板だけです、あるのは。見落としたらわからない。

これは考え方によると、日本の国立公園というのは、そこまできちっと行き届いていないのか、逆に言うと、日本中が国立公園なのか。ですから、それが非常に私の疑問で

す。皆さんが、なぜ国立公園をよくわからないのかというのは、国立公園外と中との、きちっとした、そういうデザインとか、そういう物に対する管理の仕方とか、そういうことが、必ずしもきちっと皆さんに伝わっていないのではないかと、というふうに思っております。それでは、今までの議論を通じて、まだ言い足りないこともおありでしょうから、ご発言がおありの方。まず岩槻先生から。

【岩槻】 国際対応のことが話に出ましたので、ちょっと申し上げたいことがあるんですけども、人と自然の共生というのは、日本人はやってきたのに、今ごろ言葉が必要になったということを、さっき申し上げましたけれども、この言葉は英語になりにくい言葉です。今、無理に英語にしていますけれども、英語にして西欧人に説明しようとしても、なかなか解ってくれないことなんですね。それは先ほど言いましたコンセプトの違いがあるせいなんです。

そして、地球のサステナビリティを考えようということになりますと、このコンセプトがないと、実は成り立たないのであって、日本は、そういうことをもっと世界に向けて、積極的に発信しなければいけないと思うんですね。そういうことを発信することこそが、日本の環境をよくする、よく守っていくということについての、世界に対する発信だと思うんですけども、そのことに関してもう1つ、先ほど言おうと思って、言い落としていたことがあります。

それは、日本の自然がこんなにきれいに保たれている、国立公園がこんなにきれいな写真の素材になるというのは、やっぱり森林が一度も焼かれたことがないということなんですね。実は最近、日本の照葉樹林と中国の照葉樹林とを比較対照する調査をやったりしているんですけども、中国は、どこでも森林は必ず焼かれているんです。それは戦争なんです。戦争があるときには、林を焼き尽くす戦争をするんです。日本も、戦国時代もありましたし、戦争をやってきていますけれども、日本では森林を焼き尽くした戦争はやっていないんです。ですから奥山が維持されている。

信長が比叡山を焼き尽くしたというような話が歴史の本には書かれていますけれども、あれも最近、詳細な調査がまた行われて、実際に焼かれたのはお寺の周辺だけであって、全山が焼かれたわけではないようなんです。科学的にそういうことが言えるらしいです。自分がやったわけではないので、「らしい」と言わせていただきますけれども、それは、地形がどうだとか、植生がどうだとかいうこともあるかもしれませんが、それ以上に、やはり日本人の自然に対する畏敬の念があって、だから戦争をするのでも、誰か代表者が出てきて、「やあ、やあ」と言って、代表者が負けたら、「もう負けた」というような戦争のやり方ですね。圧倒的に敵を全部殺戮してしまっ、それを殺戮するために林を全部焼き尽くすというような、そういう自然をムチャクチャにしてしまうような行為は、日本人はやってこなかったんですね。

そういうことが、人と自然の共生というコンセプトの根本にあると思いますので、そういう根本的なコンセプトを地球全体に広げることによって、生物多様性国家戦略も大切ですし、コンベンションが今度、COP10 が日本で開かれたら、そういうことが、もっ

とまったく広報されるようになると思いますけれども、その基本には、やはり日本人のそういう自然との付き合いの仕方があるんだということを、私たちは、ご先祖様たちがそうであったということに自信を持って、地球に発信する必要があると非常に強く思うんですね。

【熊谷】 ありがとうございます。田部井先生、何かございますか。

【田部井】 先ほど、熊谷先生がおっしゃったように、本当に「ここから国立公園です」というゲートは、日本にはないので、意識としては、「今、自分が国立公園の中にいるのか、外にいるのか」ということが区別できないというのは、よくわかるんですね。私は、磐梯朝日国立公園の中に、もう27年間、住ませていただいているんですが、裏磐梯のほうに行きますと、ガソリンスタンドも、それから7時~11時までの、あのコンビニエンスの看板も、みんな地味なんです。それを、中高生と一緒に歩いていたときに、「ここも国立公園で、こうだよ」と言うと、すごくびっくりして、「ああ、人が住んでいていいの!？」というようなことも、言うようなお子さんもいるんですね。もちろん私の家の屋根も非常に地味な色ですけども、それはそれなりに、「自分たちが、その中に住ませていただいている」ということで、非常に感謝してはいるんですが。

エベレストに一番最初に登ったエドモンド・ヒラリー卿という方がいらっしゃいます。まだお元気で、今、ニュージーランドのオークランドに住んでいらっしゃるんですが、実は数年前に、高校生と一緒に尾瀬を歩いていただいたんですね。世界中を歩いていて、しかもニュージーランドという国に住んでいるヒラリー卿が、尾瀬を見たときに、もう本当に感嘆いたしました、「こんな美しいところが日本にあったのか!」とっておられたその表情が、今でもありありと目に浮かぶんです。そのとき、高校生を対象に、尾瀬の中で講演をしていただきました。「君たちは、こんな美しい国に生まれて本当に幸せだよ。こういうことをずっと守っていけるような、正しい知識を持った、正しい判断ができる大人になりなさい」と。

そういった言葉を聞いたのは12カ国の高校生だったんですが、北海道の高校生が、もう涙を流していました。「自分は北海道ですごく感激していたけれども、本州にもこんなところがあったんだ!」という、その感激が涙になって現れて、あとで作文を読んだときに、私も非常に感激したんですが、こうして本当に偉大な、まあヒラリー卿でなくてもいいんですけども、実際に自然公園の中を歩く。それだけで彼らはこんなに感激するということを体感しましたので、やはり美しいところは、若いうちに、まあ中高年になってからでも遅くはないかもしれませんが、ぜひ体感することぜひこれから進めていきたいなと思います。もう本当に日本は美しい自然がたくさんあります。明日は、ぜひお出かけいただきたいと思っています。

【熊谷】 ありがとうございます。田部井先生のお話を聞くと、すぐ元気が出ますね。黒田審議官、何かご発言はございますか。

【黒田】 私も元気をいただきました（笑）。本当に若いうちというか、本当に小さいころから、国立公園の中で自然にいろいろ触れるとか、体験するとか、そういうことができるようになるといいなということで。でも、もう今、小さいと言っても、小学生でも「勉強、勉強」と言われるケースか、あるいはカチャカチャとやっている、そういうケースがずいぶん多くて、本当に普段でも外に出なくなってきましたよね。それを、まず先に国立公園に連れていってもらって、感動・感激という言葉が知らなくても、心を動かしてもらおうとか、あるいはそうではなくても、話は国立公園から離れてしまいますけれども、家の外に出て、もう夕方まで帰ってこないというような、「それでもよいのだ」というような、何かそういうふうになってもらいたいなと思っていますが、それはきっと、もう小学生では遅いのかも知れない。幼稚園とか、保育園とか、ああいう中でうまく取り入れられないかとか、そんなことを思っています。

田部井さんのお話の中にもありましたけれども、「国立公園って、よくわからない」と。熊谷先生がおっしゃるように、まあ私は、「日本中が国立公園のようだ」と、こういうふうに信じたいんですが、でも冷静に考えると、「そんなことがあるわけではないな」と、こういうことになりまして、遅ればせながらというか、弁解じみたことですが、環境省も、やっぱりその点は、ちょっと感じるころがあって、国立公園エントランス整備事業というのを最近、始めています。環境省がいくつかの場所で、わりあい国立公園らしいデザインで、「ここが入り口ですよ」というのを示そうということで、具体的に、例えば「サミットが開かれる洞爺湖では、しっかりやろう」とかいうことで検討しているんですけども、実は、いろんな人が、いろんな看板を、それぞれの趣味で立てているということで、そこにまた重ねて立てるのもどうかねということで、そのへんが悩みの1つになっています。

やっぱりそれぞれ、一人ひとりの方々が、岩槻先生もおっしゃっていましたが、自信を持つようになることが大事で、そのためには、まあ、グルグル回ってしまう話なんですけれども、まずはやっぱり美しい自然に触れてもらうことが大事かなと思っています。そういうのを積み重ねいくと、国立公園の中で住んでいるというか、生活をしたり、本当に毎日かかわっている人たちも、「ああ、やっぱり自分たちのところをもっとよくしよう」と、こういうふうに思うようになってもらえるのかなと思っています。

日本は経済成長の時代から、国土を改変するという動きが非常に激しくあって、いわゆる自然破壊と。まあ「広辞苑にはない」というお話もありましたが、自然破壊が進んでいる中で、自然の保護は何かというと、規制ということで、人が何かをやるのに対して、しっかり慎重に審査をして、いいか悪いか判断をして、荒廃していくのを防ぐことが中心だったわけです。もちろん、そういう取り組みを続けていくことが大事なんですけれども、これからは、それだけではなくて、先ほど、ちょっと言いましたけど、例えば自然再生とか、あるいは景観法というような仕組みもできて、もっと質のよい地域にしていく。

それは自然だけではなくて、観光地というか、国立公園の中の地域の景観も含めて、その質を高めていくというほうに、かなり力を入れていかないと、何て言うんですかね、

気持ちだけが空回りしてしまうのかなと思っていて、そのへんに力を入れ、そういう意味では、数はそんなにたくさんいないながら、私どもの仲間であるパークレンジャーに頑張ってもらうように、いろいろな相談をしているところです。

【熊谷】 ぜひ空回りしないように、お願いいたします（笑）。それでは、長くお付き合いいただいているので、会場からご質問をお1人か、お2人、時間がございませんので、もしおありでしたら、お受けしたいと思います。どなたにでもけっこうですので、ご質問がおありの方は挙手をしていただいて、ご質問の前に、お名前だけをおっしゃっていただいて、ご質問していただけたらと思いますが、いかがでしょうか。たぶん100人くらいあると思いますけれども、代表してお1人か、お2人。けっこうですので、どうぞご遠慮なくご質問いただけたらと思います。無料ですので、どうぞ（笑）。

【質問1】 奥山や国立公園に朝早く行ったことがありますけど、誰もいないんですね。そうすると、とっても怖いんです。やっと男の方と会って助けてもらいましたけど、ちょっとそういう、避難所っていうんじゃないんですけど、助けてくださるところが目印にあると、1人でも楽しめたり。自然から受けるものは、私のように都心に住んでいる者には、とても、それこそ元気が出るんですね。お願いいたします。

【熊谷】 もしお差し支えなければ、お名前と……。

【質問1】 中央区のキタノフミコでございます。

【熊谷】 お差し支えなければ、おいくつでいらっしゃいますか？

【質問1】 83歳です。

【熊谷】 ありがとうございます。「公園の中が、怖くてしょうがない」というお話ですけど、審議官。

【田部井】 それは繰り返し言わないと……。

【熊谷】 では田部井先生とお2人から。では田部井先生。体を鍛えて（笑）。

【田部井】 難しいんですけれども、自己責任なんですやっぱりクマが住んでいるところに人間が入らせていただくというようなことがあって、外国では、まったくの自己責任になっています。ただ日本では、やりすぎたりして、ロープなんていうのも張ってくださるんですが、そうすると、「ロープを張っていなかったから、落っこっちゃった」みたいな、そういうことが言われてしまうのですがこれはおかしいです。やはり自然の中

というのは、動物たちがいて、植物のある中に、人間が入らせてもらいますという、私はそういう気持ちなものですから、常に「登らせていただきます」という気持ちで、そこに人が注視する建物があったり、というようなことは、あまり目にはしていません。いかがでございましょうか。

【質問 1】 それは自然の美意識に沿っているわけですね。自然というものの、そういうことがね、都会育ちで（笑）。

【熊谷】 まあ田部井先生はスーパーウーマンですから、クマでもなんでも逃げていきますので、あれですけど、たぶん環境省の審議官としては、お答えになりにくいかもしれませんが、これからの利用については、専門のガイドさんを、今、どんどん養成して行って、専門的な案内をする中で、たぶん私は、そういうお年寄りの方とか、あるいはハンディキャップを持っている方とか、そういう方に対して、そういうガイドさんが、きちっと面倒をみながら自然公園を案内する、というふうに変わっていかないと、もう国立公園はダメだと思いますので。いやいや、審議官、そうですよね。

【黒田】 たぶん今、自然公園はすべてそうだと思います。海外でも、非常にガイドさんが親切に。そのかわり、それなりのお金はかかるとは思いますけれども。ですから日本は、まだまだ改善する余地は十分あると思いますし、そうなってくると、本当に日本の国立公園というのは、世界にも誇れる保護と利用と美しさを持った公園になるのではないかと、いうふうに思っております。

【熊谷】 他にご質問は、何かございますでしょうか。では、そちらの方。お名前と、どなたにご質問かということだけ、言っていたらいい。

【質問 2】 東京農業大学造園科学科のシノハラミオと申します。黒田審議官に質問なんですけれども、国立公園を指定する段階で、ゲートといいますが、囲いをあえて作らなかったのか、それともたまたま作らなかったのか。もし、あえて作らないでおいたということに意味があるのでしたら、お教えいただけませんか。

【熊谷】 よろしくお願いたします。

【黒田】 農大の学生さんということですから、少し専門的な言葉を使いますと、最初にお話した通り、日本の国立公園というのは、例えば環境省の土地であれば、「ここは環境省の土地で国立公園ですから、入るのもルールに従ってやってください」というようなことにできるのかもしれませんが、アメリカの国立公園なんかは、現にそういうふうしているところはたくさんあります。ところが日本の国立公園は、地域制というふうに、われわれは呼んでいますけれども、その地域を国立公園として指定する。その中には国

有地もあれば、民有地もあるということで、環境省がゲートを作って、「ここは、あなたは入ってはいけない」とかということが、なかなかなじむような仕組みにはなっていません。

特に国有地というのは、過半だったかな、ありますけれども、これも林野庁が管理をしている国有林を国立公園として指定しているということになりますので、ゲートを作って、人の出入りをコントロールするというのは、やっぱり。特に国土のわりに人がいっぱいいて、要は人口密度も高く、土地利用が非常に多目的というか、高度な利用を迫られている日本で、国立公園の専用の場所というのをつくっていくというのは、なかなか難しかったという歴史的な背景と、それは今でも、その状況は同じなわけですが、そういう中で、例えばゲートを作る。そして、そこで入山料を取るといったことが、なかなか実現しにくい状況です。

そういうものを、これからどうしていくのかということですが、例えば、あんまり人が集中したりすると、自然も荒れてしまうし、あるいはそこを利用するときに、自然を見に来ているのか、人の背中を見に来ているのかわからない、というようなことにもなりかねないということで、今回、50歳の誕生日を迎える自然公園法を数年前に改正して、利用調整地区という制度をつくりました。そこは必ずしも「ゲートがあって、門番がいて」ということとはリンクしないんですけれども、一定の仕組みをつくって、「1日に利用できる人は何人ぐらいですよ。そしてガイドを付けてください」というような、その利用ルールをつくって、自然を傷めることなく、永続的に使っていけるように。また人がいっぱいいると、動物も逃げてしまうというようなこともあるわけですが、その自然を、できるだけあるがままの状態で見てもらえるようにと、そういう制度をつくって、今年の9月に大台ヶ原で、日本で第1号の利用調整地区というようなものができています。ですから、そういうところでは、ある意味、見えないゲートができている。そういうような取り組みというのは、少しずつ進んできています。こういう状況です。答えになりましたか。

【熊谷】 ありがとうございます。大変鋭い質問だったものですから、答えがちょっと長めになりましたけれども、ありがとうございます。まだご質問がおりかと思えますけれども、予定された時間がまいりましたので、会場からのご質問は、これで終わりにさせていただきます。ご協力、どうもありがとうございました。

それでは最後に、今日、会場にお集まりの皆様に対して、お一言ずつ、国立公園、あるいは皆様に何かサゼッションを与えていただくなり、あるいは期待をしていただけるものがあれば、お1人1分で、田部井先生からお願いしたいと思えます。よろしく願いいたします。

【田部井】 私は今、68歳ですが、私が生きているあいだに、国立公園サービスが受けられるようにしていただきたいと思えます。ぜひよろしく願いいたします。

【熊谷】 ありがとうございます。では続いて岩槻先生、お願いいたします。

【岩槻】 今日は、日本の芸術の世界を代表される先生のおあとで、科学の端くれにいる者が話をするので、ずいぶん肩に力が入ってしまったようだったんですけども、やはり美しい日本の自然というのを、科学の世界でも、どう有効に活用できるかということを含めて、美しい日本の自然の保全というのが大切だということを訴えたいと思います。先ほど、審議官は話の中で、「小学校でも遅いかな」という言い方をされましたけれども、人は元来、生涯学ぶものです。今日は国粋主義者みたいに、日本のいいことばかりを言いましたけれども、西欧に比べて遅れているところは、学校教育体制ではなくて、生涯学習支援のシステムです。

生涯学習というのは、「ゆりかごから墓場まで」と言われるんですけど、生物学的にはそれでは遅いので、僕は「受精卵から墓場まで、人は学ばなければいけない」というふうに。今、兵庫県の博物館で若い人と一緒に、生涯学習支援というのが、いかに日本でプロモートされるかということ、一生懸命にやっているんですけども、非常に前向きな成果が出つつありますので、「日本は捨てたものではない」というふうに、そちらの面でも思っています。環境の問題というのは、“Think globally, act locally”と言われますけれども、皆さんも、やはり自分の周りから環境の問題を考える、自分が学びとるという姿勢で、一緒に考えていただけたらというふうに思います。ありがとうございました。

【熊谷】 それでは黒田審議官、一言。

【黒田】 もう本当に一言で。今日、いろいろなご意見を頂戴しまして、ありがとうございました。最初のお話でも言いましたけど、本当に今日ご来場の皆さんをはじめ、もうたくさんの方に、国立公園を見ていただきたいと思いますし、自然に親しんでいただきたいと思います。この一言に尽きます。どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

【熊谷】 ありがとうございます。本当でしたら、ちゃんと取りまとめをしなければいけないんですが、時間がまいりましたので、私からも一言。私の大先輩で、「国立公園の父」と言われている田村剛先生という方がいらっしゃるんですが、その先生が、「日本の風景美を海外から来た方に説明するとき、侘寂（わびさび）について説明しても、誰一人わかってくれない」と。これは昭和18年のころの話ですけども、当時、海外から来ている、それこそ国立公園とか造園の専門家に侘寂（わびさび）を説明しても、全然通じなかったということで、これは最初の基調講演の平山大先生のお話にもありましたが、次の岩槻先生のお話にもありましたけど、侘寂（わびさび）は、外国人にはわからないと、もうあきらめて、今日お越しの皆さんは、「侘寂（わびさび）がわからない」なんて言わないように、ぜひお願いしたいと思います。以上でございます。今日は、本

当にどうもありがとうございました。

それでは、これもちまして、本日のパネルディスカッションを終了とさせていただきます。ありがとうございました。先生方、どうもありがとうございました。それでは司会の深澤さんにお返しいたします。

【司会】 パネリストの皆さん、コーディネーターの熊谷先生、本当にありがとうございました。皆さん、いま一度、大きな拍手でお送りください。

(拍手)

【司会】 会場の皆さん、長時間、ご清聴、ありがとうございました。以上をもちまして、自然公園法 50 周年記念シンポジウム『美しい日本の自然』を、すべて終了とさせていただきます。

最後に、お願いがございます。受付のときにお配りいたしましたアンケート用紙を回収させていただいております。ご記入の上、受付の係の者にお渡しください。ぜひご協力くださるよう、お願い申し上げます。また造園 CPD プログラムの登録を希望される方は、受付に用紙を置いておきますので、午後 6 時までにご記入ください。

またロビーの後援団体による展示・販売ブースと、5 階・大会議室の、日本の国立公園とサンゴ礁の写真展は、午後 6 時まで開催しております。まだご覧になっていない方がいらっしゃいましたら、ぜひお帰りの際にご覧になってください。それでは、どなた様も、お忘れ物などなさいませんように、お気をつけてお帰りください。本日はご来場、ありがとうございました。